

第4章 新しい観光対象と関連産業の成長

産業革命をいち早く達成したイギリスでは、1850年頃から労働者階級にも新しい余暇時代の曙光が見え始める。産業革命がもたらした突出した工業力の恩恵、穀物の値段を高値に維持していた穀物法の廃止（1846）と自由貿易運動の勝利、ラッドライトやチャーチスト運動などによる過重労働への抵抗と労働時間の軽減などによって、労働者階級にも自由時間と可処分所得が徐々に増え始める。

最初に労働者の余暇問題に注目したのは、温情主義的な工場主であり、行政改革家、労働運動のリーダー、福音主義者、それに動物愛護家や禁酒・安息日遵守を勧める社会運動家たちであった。彼らによって、労働者のための合理的かつ健全な娯楽が提供されたが、こうしたピューリタンの運動によるレクリエーションはあまり広がりを見せず、むしろ労働者に生じた自由時間と所得のゆとりをビジネス・チャンスと見る企業家の手腕と工夫によって、余裕のできた労働者から次第に余暇活動が活発化していく。

その代表的な事例が鉄道によるエクスカージョンであり、海浜レジャーであり、スポーツとその観戦であり、イベントへの参加であった。スポーツにしる、諸々のイベントにしる、参加する人の移動と必要な器具・資材の輸送が容易になってはじめて成り立つものである。鉄道網の拡大は人々のモビリティの拡大だけでなく、生活の質にも変化をもたらしはじめたのであった。

周遊型の観光行動については、第3章と第5章（国際船の旅）で取り上げているので、ここでは観光と縁の深いその他のいくつかの項目について概観する。

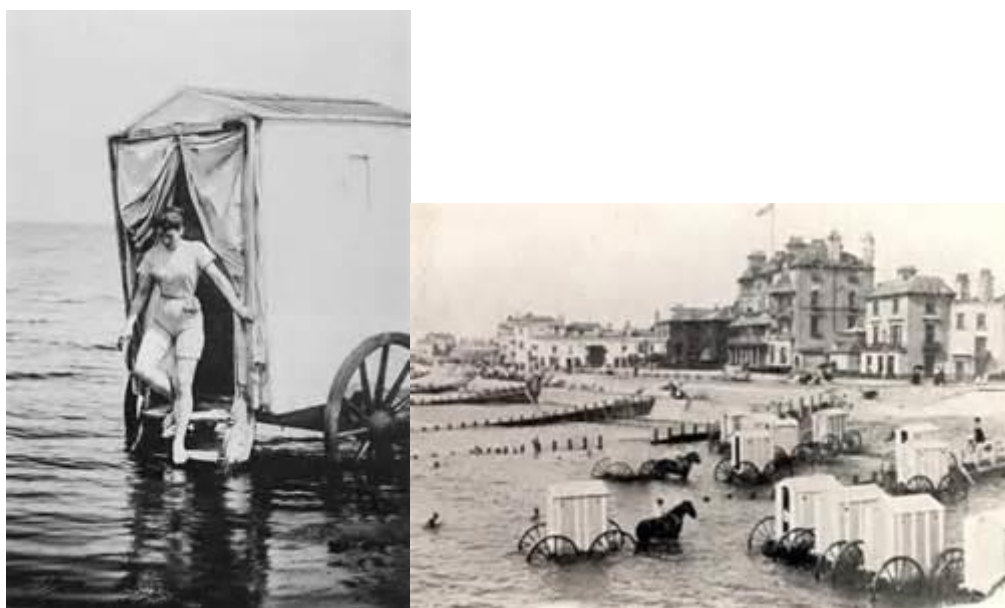
1. 海浜リゾートの開発

18世紀の半ば以降、内陸の温泉地に代わって海浜リゾートがイギリスの貴族や富裕層の夏期の社交場として登場し、これを見習って大陸側の大西洋岸でも海浜リゾートが誕生していたことは、第4部第1章で触れた。その時点ではまだ特権階級の保養と気晴らしと社交の場でしかなかったが、鉄道網が広がって海浜地帯にまで及ぶようになると、中流階級以下の人々も、きれいな空気と海水浴を求めて海辺に出かけるようになっていく。

イギリスの海浜リゾート

イギリスでは、産業革命の進展以前に、すでにブライトン、ブラックプール、ウェイマス、スカーバラ、マーゲイトなどが海浜保養地としてある程度開発されていた。当初は陽光とオゾンときれいな砂浜に健康と社交の場を求めて集まった人々が、海水浴にも新しい快楽を見出していく。そのために新たに登場したのがベイジング・マシンである。図に見られるように、海水浴客を浜から水際まで運ぶ幌馬車のようなもので、女性客が着替えをする更衣室でもあった。ロンドンに近いマーゲイトの浜辺には、1780年にこのようなマシンが20台置かれており、1800年には40台に増えていたという（「レジャーの社会経済史 p119」）。

鉄道支線が海岸にまで達し、中産階級や上級の勤労者階層がビーチに行きやすくなると、海浜リゾートが広くイギリスの海岸地帯に誕生する。都市生活からの逃避という要素もあった。勤勉で事業に熱心な中産階級や地方都市の商工業者も、都会の煤煙と喧騒を逃れて、新鮮な大気と健全で多様な慰楽を求めて海浜を訪れるようになる。彼らが上流階級の優雅なライフスタイルを模倣し始めると、夏の2～3週間の休暇を海辺で過ごすことが中流階級のステイタス・シンボルとして定着していった。働き者の中流階級はリゾート・ライフにおいても堅実で、海水浴、散策、乗馬、植物採集、小石や貝の採集、付近の古代遺跡の訪問、ダンス、カード遊びなどが主たる楽しみであったという。貴族やジェントリーたちの自由闊達な行動に比べれば、彼らのそれは福音主義的な道徳からくる抑制のきいたやや堅苦しいものであったらしい。



夏場の海水浴だけでなく、イギリス南部は気候がマイルドで、避寒用のリゾートとしても利用されるようになる。ドーバー、ワイト島、ボーンマス、トーケーなどである。さらに、風光明媚な湖水地方やウェールズ北部なども、ランカシャーの綿業成金の別荘が立ち並ぶリゾートとして開発され始める。

これらの海浜リゾートの発達を促したのが鉄道であった。1844年にロンドンからブライトンへの鉄道が開通し、ブラックプールはその2年後の1846年に鉄道で結ばれた。鉄道の開通は大勢の行楽客を運んできたが、同時に、のちに観光公害と言われるようになる環境悪化をも他国に先んじて顕在化させる。とくに内陸の湖水地方では、汚染水の逃げ場がなく、激しい鉄道敷設反対運動が起こり、イギリス固有の自然と文化遺産の保存運動「ナショナル・トラスト」(後述)誕生の遠因にもなった。

勤労者階級の海浜リゾート進出 ヴィクトリア時代(女王在位1837~1901)は、工業化とともに都市化が急速に進んだ時代でもあった。この時代、ロンドンをはじめとする大都市

では、住居の過密、不衛生な生活環境、大気や水の汚染、コレラの流行など、十分な対策が取られないまま都市化に伴う様々な環境悪化が進行した。1853年に初めて工場の噴煙を規制する「煙害排除法」 **Smoke Nuisance Abatement** が誕生したが、これは工場だけが対象で、家庭の排煙を含む都市全体の大気が問題であるという認識はまだなく、むしろ《空を覆う黒煙は繁栄のシンボル》とさえ考えられていた。汚染は水質にも及んだ。川が汚染されると、川を取水源とする水道水が汚染され、コレラの大流行を招いた。世界の工場となったイギリスは、どこよりも早く産業公害、都市公害問題を抱え込むことにもなったのである。暖かいシーズンになると、都市住民のうち、可能な者から健康と慰楽を求めて海浜をはじめとするリゾートへ出かけたのは自然の成り行きであった。

大雑把にいうと、1870年代までのリゾートの客は、首都ロンドンと地方工業都市の中流階級までであって、労働者階級が海辺で休日を過ごすようになるのは、19世紀の最後の四半世紀以降である。この時代にイギリス各地のリゾートが急速に大衆化し、俗化し、歓楽地化していく。大衆化が進み、レジャーが産業化すれば、リゾートの人口増に反映する。1851年に人口が1万人を超える臨海リゾートは9市に過ぎなかったが、1881年には23市、1911年には39市に増えている。人口5万人以上となると、1881年までブライトンだけであったが、1911年には以下の8都市に増えている。多い順に、ブライトン、ボーンマス、サウスエンド、ヘイスティングズ、ブラックプール、グレートヤーマス、ゴールストン、イーストボーン、サウスポートであった。

労働者階級のリゾートへの進出が最も早かったのはブラックプールである。綿工業の中心地ランカシャーは比較的雇用が安定しており、無給ではあるが夏祭りの1週間、工場を一斉休業にする習慣があった。具合よく、近くにアイリッシュ海に面するブラックプールという格好のリゾート地があったというわけである。したがって、夏の連休中はどの町もがら空きになり、商店は閉まり、芸人たちも海辺に移動した。他方、羊毛工業の中心地ヨークシャーでも労働者階級が海辺レジャーに参加を始めるが、ランカシャーより10年ほど遅れて発展した。これに対し、近代的大工場が少なく、労働規律のゆるい中小企業だけの地方都市では、労働者が海辺に繰り出すのは、世紀の変わり目から第一次世界大戦前夜くらいからである。

レジャー栈橋 大きく発展した海浜リゾートの象徴はピア **pier** と呼ばれるレジャー用栈橋であった。ピアといえば普通は船の発着に使われる栈橋だが、海浜リゾート（湖水にもある）のそれは、浜辺から海中に突き出した長い突堤であり、この上に適宜施設を設けたものである。ベンチで日光浴しながら人々を観察したり、突端に作られたパヴィリオンではバンドの演奏が行われ、軽い食事をとることもできた。のちには、人々の会合の場所であり、プロムナードであり、娯楽センターとなって、庶民が心身ともにリフレッシュするレジャー栈橋へと転化していった。

スケグネスの開発 中流階級以上のリゾート客しかいなかったところへ、新たに労働者階級が押し寄せてくるようになると、ビジネス・チャンスを拡大する方向と、リゾートの俗化、劣化との兼ね合いが難しくなる。後世、リチャード・バトラーらが提唱した「観光地発展段階論」が述べるように、大衆化が進むと上等客は新天地を求めて去って行ってしまふ。受け入れる地主や自治体がどのように開発に係わるのかが問題になってくるのである。荒井政治「レジャーの社会経済史」は、当時の海浜リゾート開発を、開発主体別に事例を挙げて説明しているが、ここでは、中東部の新リゾート「スケグネス」の例を見てみよう。鉄道の開通がリゾート開発に直結し、領主（地主）と自治体が積極的に関与した事例である。

スケグネスは北海に臨む美しい砂浜の海水浴場である。1801年には人口わずか185人、1851年になっても366人という小さな漁民の集落に過ぎなかった。それが1873年にグレート・ノーザン鉄道のウェインフリート駅からここまでの支線が敷かれると、ノッティンガム、ダービーなど東部ミッドランドの工業都市から年間15万人以上（1878年）の観光客が押し寄せ、遊園地、ピア、ホテルなどができ、1883年に鉄道が複線化されてさらに発展する。自動車の時代になってからも東海岸の人気リゾートであり続け、1936年には後述する有名なビリー・バトリンのホリデー・キャンプが建設されてさらに人気を高めている。

スケグネスの開発は次のように行われた。鉄道支線の建設こそすべての始まりと考えた大地主（領主）と資本家が協力してスケグネスまでの支線（約8マイル）を敷設した。完成するとグレート・ノーザン鉄道に永代リースし、毎年リース料と運賃収入の60%を受け取る契約を締結した。スケグネスは、1723年以来、スカーブラ伯ラムリー家の1630エーカーに及ぶ荘園で、村の5分の4を同家が所有していた。荒蕪地と湿地を開発してリゾートタウンをつくる野心を持っていたスカーブラ伯は、鉄道が完成すると、伯の代理人ヘンリー・ティペット、地方自治体の書記ダシュパー等の協力によって町づくりのマスタープランを練り上げた。道路、防潮壁、上下水道などのインフラを整備し、その上で遊園地、ピア、遊覧船、プールなどを、それぞれ株式会社をつくって経営させた。最大の投資はイギリス第4位という広大なピアで、全長1843フィート（約550メートル）もあった。集客はグレート・ノーザン鉄道と提携した。鉄道が工業都市からスケグネスへ直通列車を運行すると、スケグネス側がスケグネス行きの切符をもつ乗客には入場料を無料とした。鉄道側はスカーブラ伯に切符1枚につき4分の1ペニーを支払ったうえ、伯が用意する宣伝ポスターを各地の駅、ホテル、店舗等に無料で掲出した。

開発のパターンはそれぞれ異なるが、19世紀末期には多数の海浜リゾートがイギリス各地の浜辺に誕生していた。とはいえ、海浜リゾートは、まだ日帰りか2～3泊までの宿泊客が主流で、本格的に長期滞在型リゾートに発展するのは、労働者の連続有給休暇が法によって保証される1930年代になってからである。

フランスの場合 フランスでは、1820年代からイギリス貴族の習慣を真似る形で、大西洋岸にしかるべき施設を備えた海水浴場が誕生している。イギリスの海浜リゾートの多くが、

それ以前には何もなかった海浜地帯に造られて行ったのに対し、フランスでは、臨海部に所在する歴史都市に隣接する浜辺に作られている点が異なっている。最初の海浜リゾートはノルマンディー地方のディエップに誕生した。ディエップは古くからの港町で、市街地に隣接する海浜に、1822年、最初の滞在施設ができた。パリから最も近い海浜(約200km)であり、シャルル十世の次男ベリー公爵(1820年に暗殺された)の夫人が大勢の取り巻きとともに夏に滞在したのが発展のきっかけとなり、夫人の名前にちなんでキャロリーヌ海水浴場とよばれた。1829年にはカジノや劇場を含む施設が建設されて人気を呼んだが、七月革命でシャルル十世は退位し、ベリー公爵夫人もイギリスに亡命した。その後、後継のオルレアン家のルイ・フィリップ王が1833年に訪れたのをはじめ、上流階級向けの夏の滞在地となった。1848年にパリからの鉄道が通じて便利になり、ブルジョア階級の成長とともに発展する。ほぼ同時期に、ブローニュ・シュル・メールにも海水浴場ができ、次いでラ・ロシェル(1827年)、シェルブール(1829年)などが開発され始める。

第二帝政時代に鉄道が普及すると、セーヌ河口付近のトゥルヴィルとドーヴィル、トゥーケ・シュル・パリ、南の大西洋岸のビアリッツなどが夏のリゾートとして発展していく。ビアリッツはナポレオン三世と皇帝妃ウジェニーが好んで滞在し、一躍有名になった。これらのリゾートでは、イギリスと同様女性の着替え用のベイジング・マシン(仏語ではシャレットという)も使われていた。

意外なことに、夏の海浜リゾートは地中海沿岸には開かれず、こちらはもっぱら避寒地として開発され、第一次大戦後まで夏は^{ひとけ}人気のない海岸だった(テーマ論集「避寒リゾート『コートダジュール』の誕生」を参照)。

海浜リゾートが本格的に発展するのは、やはり有給休暇法の成立以降のことになる。イギリス同様海水浴療法を主とする滞在からはじまって、やがて遊びのため、レジャー活動の場へと変わっていくのだが、ヨーロッパに固有のいわゆるヴァカンス滞在型の観光については、第6部でまとめて取り上げることとする。

2. 都市の観光魅力

19世紀後半には、都市住民による海浜や山岳地への自然観光が活発化する一方で、都市観光も新しい局面を開いていく。都市はもともと最大の観光対象地であったのだが、巨大化する大都市(メガロポリス)の空間は、周辺の農村や小都市の空間とは次元のちがう存在に変貌する。大都市と地方の分化が急速に進んでいくのだが、この二重性は大都市内部にも現れる。都市の表の顔と裏の顔という二重性である。

典型的な例がオスマン・セーヌ県知事によるパリの大改造計画であった。大量交通のために、都市計画に沿って古い街並みを取り壊し、まっすぐで幅広い大通りを切り開いていく。できあがった大通りに面して立派なファサード(正面)を持つ建物が立ち並ぶ。ファサードは顔であり、視覚的に見られる存在としてその形を強調する。なぜ視覚性が強調されねばならなかったのか。大都市は見知らぬ人たちが大勢やってくる場所だからである。

住民の多くが顔見知り、そうでなくても人々が街をよく知っていて、よそ者が少ない農村や小都市とちがい、それぞれが何の建物であるかを示す必要があった。とくに店舗には何の店なのかを示す看板がなくてはならないし、それぞれの見え方も重要視される時代になったのである。

海野弘は「レンズが撮えた 19 世紀ヨーロッパ」の中で、例えばレストランやカフェ、劇場、商店のショーウィンドーや百貨店は、この時期以降、都市の顔、都市の基本的装備になったという。他方、大都市が大通りを切り開いてファサードを飾れば、残されたそれまでの小道はすべて裏通りとなり、裏は裏の独特の魅力を発するようになる。都市の近代化は、取り残されていくアンダーグラウンド的なものへのまなざしを出現させたというのである。

表の顔だけでなく裏の顔も持つことで、大都市はますます魅力を増し、その渾然一体の魅力が観光客を誘引し、彼らが望むものを何でも提供し、楽しませるようになっていった。

1) パリで生まれたレストラン

訪問地での食事は旅の楽しみの一つである。観光客にとって、宿屋やホテル内の食堂は飲食の保証ではあるが、個性的なレストランが都市の装置として宿舎の外に存在することは大いなる魅力である。

フランスは大革命前から美食の国として名高く、王侯貴族は美食を競い、優れた料理人や菓子職人を召し抱えて育てるのに熱心であった。料理人たちは工夫をこらし、腕を振って主人や客を楽しませようと力を尽くした。だが、彼らが作る料理や饗宴の様子は幾重もの壁と厚いカーテンの向こうに遮られていて、そこに招かれる特権階級以外には窺い知ることができなかった。18 世紀に巷で外食するためには、宿屋の食堂か仕出し屋のお仕着せ料理しかなく、パリを訪れる旅行者たちの不満の声に満ちていた。19 世紀になると、それが一変して、パリがグルメの町としても名を上げる。フランス革命によって貴族が逃亡したり処刑されたりして、抱えられていた料理人たちが職を失い、彼らが手に着いた職を活かして市民のために腕を振るうようになったのである。それに、パリには革命前後から多くの知識人や社会運動家が流れ込んで、外食するほかはない人々が増えていたこともレストランの繁栄を支えたのであろう。

王侯貴族の美食の歴史は横に置いて、街の人々や旅行者のためのレストランの誕生と発展の様子を見てみよう。レストランは、既存の外食場所の延長線上にはなく、まったく新しい施設として登場した。それゆえに、それ以前の施設とは無縁の名前を与えられたのであった。

レストランの語義 もともとレストラン restaurant という言葉は〈元に戻す〉、〈再興する〉などを意味するフランス語の動詞 restaurer に、英語で言えば～ing (～ant) のついた形容詞であった。食事をする場所ではなく、疲労したり、健康を害したりした人が元気を回復するために飲むスープであり、薬用に近いものであった。レベッカ・スパンク「レストラ

ンの誕生」の冒頭に、レストランという語の変遷が紹介されている。15世紀には早くも《レストラン》のレシピがあり、半ば医学の調合薬のように定義されている。1708年のフリュティエール「大辞典」には滋養分の高い食べ物《レストラン》として登場しているし、18世紀の百科全書は、レストランを医薬用語として扱っている。要すれば、肉や魚や野菜を十分に煮込んでエキスを抽出した滋養豊かなスープ（ブイヨンやコンソメ）であり、18世紀のフランスの料理本の多くは、ブイヨンをベースとする《レストラン》のレシピを載せている。スパングが例示するレシピ（1739年）を見ると、中々手の込んだものである。金もかかりそうで、元来は料理人を抱える王侯貴族や富裕なブルジョアだけが享受しうるものであった。

…玉ねぎのスライス数枚、牛の髄骨少々、上質の子牛の白肉適量を、洗い上げた錫メッキの鍋に入れる。子牛の上に、汚れと脂肪分を取り除いたハムの数片とニンジンとパースニップ（セリ科）のスライス数枚を重ねる。絞めたばかりの健康な鶏から臓物を取り除き、内外を丹念に洗う。切り分けた後細かく刻み、肉が傷まないうちに鍋に入れ、子牛の細切り肉とハムの皮をさらに二、三片加える。このエキスを2パント（2リットル弱）作るのに、鶏一羽と子牛の肉4、5ポンド、ハムが4オンスほどで足りる。これらの材料をすべて鍋に入れたら、ブイヨンを1カップ加え、鍋を密封して強火にかける。肉に焦げ目がついたら、肉汁を出すために中火にして45分煮る。鍋にこびりつかないように注意し、適宜少量のブイヨンで水分を補給する。水分の量を加減してレストランが苦すぎたり、濃くなり過ぎないように、甘く滑らかに仕上げる…

この特殊な健康回復剤の名称が、食事を提供する場所の名前に転じていくのに何世紀もかかったのである。途中は省略して、19世紀の権威あるアカデミー・フランセーズの辞典（第6版、1835年）の定義を紹介すると、以下のとおりである。

レストラン：形容詞。体力を回復・復元する意。《回復薬・回復剤・回復食》。より一般的には名詞として用いられる。使用例「ワインとブイヨンはよいレストランだ」。とりわけ、美味この上ないコンソメや肉汁のエキスについて用いられる。意味を拡張してレストラトゥールの店舗をも指す。使用例「新しいレストランがこの通りに誕生した」「彼はレストランを経営している」など。

レストラトゥール：名詞。修復し、復興させる者の意。都市や記念建造物について言う場合を除いて滅多に使われない。むしろ精神的な意味で用いられることの方が多。「法と秩序のレストラトゥール」など。別議では、料理の種類と価格を一種の掲示板に明示し、時を定めずに、一人前ずつ食事を提供する料理人兼仕出し屋という意味でも用いられる。

ちなみに、フランス料理の大御所ブリア・サヴァラン「美味礼賛」（1825年）がどう書いているかというところ、「レストラトゥールとは、一般の人に、いつでも準備されたご馳走を提

供することを商いとする人のことである。各料理は一人分ごとに定価をつけられ、消費者の注文によって商われる。この店をレストランと呼び、レストランを経営するのがレストランールである。」(ブリア・サヴァラン「美味礼賛」 p 138)

旧体制下のパリ外食事情 この滋養・健康回復剤《レストラン》が、われわれの知るレストランに転化していく経緯はおよそ次のとおりである。

フランス革命前の時代、旅行者や自宅に炊事施設を持たない者が食事にあつくには、二つしか方法がなかった。知人の食卓に招かれるか、宿屋または仕出し屋の定食用テーブルで食べる、のいずれかである。金が出せる人は仕出し屋から料理を運ばせることもできたが、仕出し屋の出前は肉など何人分もの大きな塊の注文しか受け付けなかったから、非常に高くつき、個人向けとしては得策でなかった。旅行者の場合、著名人でさえ毎食知人の食卓に招かれるのは無理だから、定食用テーブルで食べる。定食屋といえば誰でも迎えてくれる公平な制度のように思えるが、一つの大きなテーブルで時間を決めて供され、各人が自分の皿にとりわける。供されるのはお仕着せ料理で、食べる側が好みの料理を注文したり、特別のサービスを要求する機会はまずなかった。

18世紀前半に「旅行者のためのパリ滞在アドバイス」(1727年)を書いたドイツ人ヨアヒム・ネマイツ(1679~1753)は、パリのカフェでの会話は刺激的で面白いし、建物も荘厳で魅力的だが、食べ物はひどいと書いている。パリで改善してほしいのは街路の照明でもスリの取り締まりでもなく、最大の問題は料理の質だと断言する。長々とした紹介状を持たずに旅する通常のパリ訪問者は、宿屋や仕出し屋の長テーブルで食べることを強いられ、「出てくる肉の調理が不適當だったり、献立が毎日同じで変化がなく、うまい食事には全くありつけない。そのうえ、テーブルに座っている者の素性は明かされないから、気を許してはならない」のだった。1763年にイタリア旅行に出たトバイアス・スモレットや、フランス革命直前にフランスを旅したアーサー・ヤングも、パリの食事に同様の不平を漏らしている。要するに、当時のパリには外食を楽しむシステムがなかったのである。

なぜそうだったのか。食の歴史を語る本は、すべからく旧制度時代下のギルドのせいだとする。パリには何千という飲食物の小売商が存在したが、これらが勅令によって25もの職種ギルドに組織され、それぞれが排他的に分野を分かち持ち、他の分野に手を出すことができなかった。豚肉屋はソーセージやハムなどの豚肉製品を独占的に扱い、肉屋は豚以外の家畜を屠殺して生肉の販売を担当した。焼肉屋は狩猟鳥獣の肉を含む肉類を焼いてすぐに食べられるように調理した肉を供給した。シチューを作るものはマスタードを作ることができず、ワイン屋の親方は人々に飲み物を売ることはできたが、料理を出すことは禁じられていた。p 24

このような事情が、後にレストランと呼ばれることになる料理専門店の誕生を遅らせ、パリ訪問客を大いに嘆かせていたのであった。

レストランの誕生 革命前の 1760 年代に〈元氣回復のための〉ブイオンを個人客に供する店が登場した。健康の館メゾン・ド・サンテなどと呼ばれ、病弱者や食物が喉を通らない不健康者が座って静かにコップ入りのスープを啜っている図である。それらの健康回復剤《レストラン》を飲ませる店が、そのまま《レストラン》とか《レストラトゥールの店》などと呼ばれるようになるのだが、もちろん、まだ健常者が食事をする場所とはおよそ縁のない存在だった。

最初に《レストラン》を一般人に売り出し、レストランの生みの親と言われることになったのが、マチュラン・ローズ・ド・シャントワゾー（?~1805、綽名をプーランジェといった）なる人物である。1765 年にルーブル宮近くのプーリ Poulies 通り（ルーブル通りが造成された際吸収されて今はない）に開いた「ローズの店」で、この店ではブイオン、コンソメ以外の食べ物も出したが、仕出し屋ではなかったから肉類は出せず、その代わりに、粗塩をそえた鶏肉や卵が出され、テーブルクロスなしの小さな大理石の食卓で食べさせた。これでも掟破りと攻撃され、訴訟沙汰になったという話も伝えられているが、訴訟を裏付ける証拠はないという（「レストランの誕生」）。レベッカ・スパングによれば、建前は兼職できないことになってはいたが、複数のギルド資格を持つ者は沢山いて、相互に融通を利かせていたらしい。ともあれ、それまでの慣例を無視したローズの〈レストラン〉は、市民には大好評で、同様の店を出す者が続出した。結果として彼が自らレストランの生みの親を名乗り、近代的レストラン第 1 号の名誉を手にしたというわけである。

外食の店を初めて作ったわけでないから、生みの親という以上、今までにはなかった店、新たなる発想の店を始めたということになる。ゆえに、名称もそれ以前の「食事場所」を連想させない名前と呼ばれることになった。従来の居酒屋や宿屋の延長線上の店ではなく、美味しい食事、客の好みに合わせる食事を定価で提供し、きちんと接客するという新たな市場を《創出＝発明》したのであった。シャントワゾー自身の説明によると、「…かかる新種の店舗は当初からレストラン、あるいは健康の館と呼ばれ、首都においてはローズ、ポンタイエ両氏が 1765 年に共同で設立したのもをもって嚆矢とする。かようなレストランの第一号は、最も壮麗なカフェと比べても全く遜色がない。…個々の料理の価格も明朗に定められている。いつでも食事することができ、ご婦人方も入店を許され、決められたほどほどの値段で夕食をとることができる。」（1773 年）

かくして、レストランの定義の項で紹介したように、初めてメニューらしきものが登場し、個別の品の定価が決められ、個人の注文によって料理が供され、しかも、いつでも食べられる「レストラン」が誕生したというわけである。とはいえ、まだ健康回復という当初の基本理念の下にあり、出される料理自体にたいしたものではなかった。ローズの次に登場する本格的なフランス・レストランは、アントワーヌ・ボーヴィリエ（1754~1817）がフランス革命前の 1782 年に、パレ・ロワイヤルの回廊（ギャルリー・デ・ヴァロア）に開業した「ル・ボーヴィリエ」である。ボーヴィリエは少年時代から料理を天職と考え、貴族の館で修業を積み、富裕階級の食べ物的一端を市民たちに供したのであった。店を贅沢な装飾で飾り、給仕するボーイたちには清潔できちんとした服装をさせ、最高の料理を供

したから、大いなる人気を呼んだ。革命前はボーヴィリエ自身、宮廷高官のいでたちで客たちの間を巡回したといわれる。革命勃発後の混乱期にも人気は衰えず、王党派や反革命派はもちろん、革命派知識人もここを愛し、ほかに同種の店がなかったため大いに繁盛した。しかし、本人が革命に反対であり、反革命派の溜まり場ようになって、1795年にレストランの閉鎖を命じられて廃業した。それでも彼は料理場を離れては生きらず、晩年にもう一度元のレストランの近くにレストラン *La Grande Taverne de Londres* を開業するが、すでに時代は変わっていて、往年の人気は戻らなかったという。

さて、1789年7月14日、パリ市民が暴動を起こしてバスチーユを解放すると、その3日後には、シャンティイ城主であったコンデ公をはじめ、貴族たちのパリ逃亡が始まる。美食で有名なコンデ公のもとには一流の料理人多数が抱えられていたが、これで失職する。コンデ公の厨房長であったロベールが、資格と技量を活かしてその年の暮れ、リシュリュー街104番地にレストランを開業した。これを最初の近代的レストランとする文献もある。いずれにしても、革命前に首都全体で50軒ほどしかなかった「レストラン」が、1827年には普通の料理を供する料理店（レストラン）となつて、その数3000軒に達し、これらの高級店だけで毎日6万食の外食を供給していたという。（北山晴一「美食の社会史」）p23。

ここまでがレストラン誕生の物語であり、以後はむしろ個別の料理人、個別のレストランの差別化と競争の時代になる。「美食の社会史」第七章「パリ・レストラン興亡史」は、レストラン誕生期の1800年からベル・エポックが終わる第一次世界大戦勃発の1914年までを6期に分け、それぞれの時代の特徴と代表的レストランの盛衰を整理してくれていてわかりやすい。この時期にフランス料理は、著名な料理人と高名なレストランを通じて外国に普及していくのだが、専門書が多数あるので、本書ではこれ以上深入りはしない。

2) カフェ（コーヒーハウス）とパブの始まり

憩いの場としてのカフェもまた都市に欠くことのできない装置の一つである。コーヒーハウスないしカフェは、コーヒー（カフェ）を飲ませる店として出発した。17世紀までのヨーロッパが知らなかったコーヒーという神秘的な飲み物を供することによって人の集まりやすい場所を提供し、のちにコーヒーのみならず、アルコール飲料を含む様々な飲み物はもちろん、軽食も供する「便利な出会いと休憩」の場所へと変貌していく。

17世紀の古典主義者以来、芸術家や作家、革命家たちは、カフェ（あるいはコーヒハウス）を溜まり場にしてきた。アトリエ、自宅、居酒屋、ビール酒場、キャバレ、バー、レストラン、パブ、などなど、彼らはいろいろな場所を利用したが、一番気軽に入れる場所として近代西欧知識人の人気を得たのはカフェだけであった（「カフェの文化史 p1）。都市の住民に便利な施設は訪問者にとっても同じで、19世紀末以降に現れる観光客にとって、カフェは便利この上ないサービスの《コンビニエント・ストア》であった。飲食や懇談の場というだけでなく、公衆電話や公衆トイレとしても利用できる有難い存在であり続けてきた。

コーヒーという飲み物 コーヒーのもとになる果実は、エチオピアを原産地とするコーヒーの木から得られるが、イスラム教のスーフィ派と呼ばれる神秘主義教派によってイエメンの山麓で栽培され、密かに飲用されていた。不思議な効用があり、その呼び名がワインと紛らわしい面もあって、1511年にはメッカでコーヒー弾圧事件が起き、この時コーヒーの飲用がいったん禁止された。しかし、禁止反対派が本部にお伺いを立てた結果、逆に正式に公認され、むしろ聖なる飲み物として扱われることになったのであった。

コーヒーを入れて客に飲ませる《コーヒーハウス》が最初にできたのは1554年、オスマン・トルコ帝国の首都イスタンブールであった。飲み方は例のどろどろのトルコ・コーヒーである。以後イエメンを産地とするコーヒーは、重要な交易物資の一つとして、モカをはじめとする紅海の港から各地に運ばれて行き、やがて海上支配権を握っていたオランダは交易品としてジャワで、イギリスはジャマイカで、フランスはアンティル諸島でコーヒーを栽培し、量的拡大による安価な飲み物となって普及していった。

飲み物としてのコーヒーの誕生については様々な伝説がある。霊的な飲み物と言われ、麻薬のような飲み物と言われ、世界中に広まって《コーヒー文化》を生むに至る飲み物だけに、その誕生は逸話に富んでいる。しかし、それらについては専門書が必ず書いているのでそちらに任せ、ここではアラブ・イスラム世界からコーヒーがヨーロッパに入り、ヨーロッパの文化に深く取り入れられていく過程をざっと見てみよう。

ヨーロッパでも、イタリアには1615年からコーヒーが入っているし、マルセイユなどの港町には早いうちに現れているが、臼井隆三郎「コーヒーが廻り、世界が廻る」によると、ヨーロッパの主要都市に初めてコーヒーハウス（カフェ）ができたのは、早い順に、ロンドン（1652年）、アムステルダム（1666年）、パリ、ウィーン（以上1671年）、ニュルンベルク、プラハ（以上1686年）などとなっている。p41。この順序は、17世紀後半、制海権をもっていたイギリスとオランダ経由のルートと、オスマン・トルコと勢力圏を接していたハプスブルグ家の神聖ローマ帝国経由の二つのルートがあったことを窺わせる。

ロンドンのコーヒーハウス

ロンドンに最初のコーヒーハウスができた事情はかなりはっきりしている。オスマン・トルコ支配下のレヴァント地方を舞台に活動していたロンドン商人ダニエル・エドワーズが、トルコのスマイルナ（イズミール）から帰国する際、シチリア出身のパスカ・ロゼという者を召使として連れ帰った。ロゼは毎朝主人のためにコーヒーを入れた。知人らはこの新奇な習慣に興味津々で、エドワーズはこれに応接歓談して丸半日つぶれる日が続いたので、時間の無駄と考え、ロゼにコーヒーハウスを開店させた。1652年のことであった。30年後の1683年にはその数が3000店、最盛期の1714年には8,000店にもなったという。もっとも、これらの数字は後述のマッキーの著作から来たものらしく、実際のところは大体500軒くらいだったと岩切正介「男たちの仕事場：近代ロンドンのコーヒーハウス」は書いている。

30 年も経てば、相当な変化が生じておかしくはないが、一体なにゆえ真っ黒でどろどろの、それまで飲んだこともなかった変な飲み物がロンドンっ子の心をとらえたのか。マーク・ペンターグラスの「コーヒーの歴史」(樋口幸子訳)は、序章を「霊薬か泥水か」と題して話を始めている。賞賛する言葉としては、「おお、コーヒーよ、汝はあらゆる心労を追い散らし、学者たちの渴望の元。これこそ、神とともにある人々の飲み物なり」という『コーヒーを讃えて』なるアラビアの詩(1512年)から引用し、否定派を代表する主張には、「なぜ殿方は、わざわざ時を無駄にし、口の中に火傷を作り、貴重な金を費やすのでしょうか。それも、あんなくだらない、真っ黒でどろりとした、汚らわしい、苦い、臭い、反吐が出るような泥水のために」と貶める『コーヒーに反対する女性たちの嘆願書』(1674年)の言葉を挙げている。

メッカのカーバ神殿の聖なる井戸の「ザム・ザムの水」に等しい効能ありと言われても、イスラムの推奨するコーヒーをキリスト教徒が喜んで飲用する理由も義務もない。眠らないために飲む、頭をすっきりさせるために飲む、という効果はあったかもしれないが、少なくともイギリスでは、コーヒーは家庭に入らず、やがて紅茶に取って代わられていることを考えれば、イギリス人の間に急速に普及した理由は、コーヒーそのものの魅力ではなさそうである。

仕事場兼情報収集の場 臼井の「コーヒーが廻る、世界が廻る」はその辺りをわかりやすく説明してくれる。端的に言えば、近代市民社会に移行するに当たり、古い時代の公と私との関係から脱皮し、市民社会の公と私との関係を築いていく過渡期にコーヒーハウスが利用されたというのである。オランダと競って西インドやアジアとの貿易に乗り出したイギリスの商人たちにとって、情報こそ最重要の武器であり、情報交換の場が絶対に必要であった。まだ新聞もなく、郵便の戸別配達制度もなかった。事務所用スペースなどほとんど存在せず、あったとしても事務所に座っていても何も始まらなかった。

そこに登場したのがコーヒーハウスである。ロゼのコーヒーハウスの謳い文句も「誰にでもコーヒーを入れてあげ、飲んでもらうことで、^{パブリック}公的な場所を提供する」というわけである。商人たちはコーヒーハウスで仕事をし、郵便を送受し、集まって情報を交換し、連絡場所として使用した。ちなみに、イギリスの公的郵便制度は馬車宿をベースに1683年に始まっているが、まだ戸別配達はしなかった。これを補う形で民間業者が始めたのが《ペニー郵便》である。ペニー郵便というのは、書状と重量1ポンド以下の小包(貴重品と壊れやすい物を除く)を、ロンドン及び近郊のどこでも、均一1ペニーで戸別配達をするサービスである。市内に179の拠点を設け(コーヒーハウスがほとんど)、午前8時から午後8時まで営業し、1時間ごとに郵便を配達した。コーヒーハウスにはそれ用の袋が下げられていて、出したい人はこの中に入れて置けばよかった。現在の電話のように使われ、一日の内に同じ人と2回も3回も連絡を取ることができた(「郵便の文化史」p58)。新聞は政府が発行するものしかなく、それではホットな情報は得られない。自分たちで作ろうとしても場所がない。では、コーヒーハウスで作ろう、というわけである。臼井の言葉を借りれば、「…

コーヒーハウスが人を惹きつけたのは、コーヒーと呼ばれる黒く苦い飲み物それ自体というより、新種の《公共の場》の魅力であり、真の商品は情報であった」ということになる。コーヒーハウスはまたたく間に市民の間に広がった。岩切正介「男たちの仕事場：近代ロンドンのコーヒーハウス」は、コーヒーハウスの基本的性格として4つの要素を挙げて解説する。第一に安さである。一杯1ペニー程度で何時間でもいられる。第二が酒のない場所であること。元来酒を禁ずるイスラムから来た飲み物であり、清教徒革命期の時代背景とも合致し、薬屋や本屋や床屋などが脱アルコールの施設として開いた店が多かった。日中からの男たちの溜まり場で、酒は夕方以降に取っておけばよかった。そして第3が上述した情報交換の場であり、第4は多目的施設であった、とする。コーヒーハウスに行けば、音楽会や芝居の切符も買え、遺失物情報もあった。巡回医療をする民間医の治療さえ受けられたという。

だが、コーヒーハウスの隆盛はせいぜい50~60年ほどで終わった。理由は、時代が進み、誰でもいっしょくたに入る公共のコーヒーハウスから、それぞれの趣味や主張に合わせた仲間たちが集まれるクラブへと分離していったこと、昔ながらの酒場が客を奪われて反攻に出たこと、さらにこれが重要だが、女性に嫌われたことである。臼井は上に挙げた『女性によるコーヒー禁止の嘆願書』の内容を詳しく紹介する。なにせ、この文書の正式なタイトルは「コーヒーに反対する女性の請願。かの乾燥させ、衰弱させる飲み物の過度の使用によって彼女たちのセックスに生じる巨大な不都合を公共の思慮に訴える」というのだそうである。内容は亭主どもが性交不能に陥る恐れから始まり、コーヒーとコーヒーハウスをこき下ろす文章が6ページに亘って書かれている。これではコーヒーの害が仮に『無罪』とされたとしても、今更家庭に入っていくのは無理であった。そこへ紅茶が登場するというわけである。

結局イギリスでは、17世紀中頃から18世紀のはじめにかけてコーヒーハウスが社会で果たしていた役割は、18世紀が進むにつれて分解され、仕事場はオフィスへ移行し、私的な会合場所としては、一つはクラブ、一つは1717年に誕生した女性が好むティールーム、そして、庶民が一杯やる酒場(=パブ)へと分解していき、コーヒーハウスは役割を終えて姿を消したのであった。

ちなみに、パブとは、エールハウス、タヴァン、インなどと呼ばれていた人の集まる公的な場所=パブリックハウスの総称で、パブはその省略形である。現代のイギリスのパブは酒を飲むだけ場所(バーに近い)になっているが、小林章夫「パブ」によれば、省略形のパブという言葉が最初に使用されたのは1865年で、大体同じ頃に多くの機能を他の様々な施設に譲って居酒屋(飲む場所)に収縮していったという。クラブはパブやコーヒーハウスに日を決めて集まっていた人たちから発生したもので、下層階級も出入りするバーに上流階級は出入りしなくなっていく。イギリスのパブもフランスのカフェ同様、話し出すと切りがない歴史をもっているようである。

ジョン・マッキーのコーヒーハウス巡り 上に挙げた岩切の「男たちの仕事場」が、スパイだったというスコットランド人ジョン・マッキー（?～1726）なる人物が書いた「イギリス旅行 Journey through England」（1714）のロンドン滞在の記述を引用している。雰囲気伝えるためにその一部を紹介しよう。

…私はペルメル街と呼ばれる通りに宿をとっていた。ここはふつう外国からやってくる者が皆泊まるところで、その理由はセントジェームス宮殿やその庭園、議会在近く、劇場に行くのも便利で、上流社会の人々が使うチョコレートハウスやコーヒーハウスも近いからである。…12 時頃、イギリスの上流社会の者たちがコーヒーハウスやチョコレートハウスに集まってくる。最高の店は〈ホワイツ・チョコレートハウス〉、〈セントジェームズ〉、〈スミルナ〉、〈ロシュフォア夫人〉、〈ブリティッシュ〉などのコーヒーハウスだが、これらの店はお互いに近くにあるので、廻れば一時間足らずで客の顔ぶれをみんな知ることができる。店に行くのに私たちはセダン・チェアー（かご椅子）に乗るが、ロンドンではこれが大変安く、一週間で1ギニー、あるいは1時間につき1 シリングである。そして、カゴかきをいろんな私用の走り使いに、ちょうどヴェネチアのゴンドラ漕ぎと同じ要領で使うことができる。…

スコットランド人はふつう〈ブリティッシュ〉に行き、〈スミルナ〉ではいろんな客が混じりあって見ることができる。この付近には、よく繁盛している小さなコーヒーハウスがいくつもある。ひとつは将校たちの〈ヤング・マンズ〉であり、〈オールド・マンズ〉は株の仲買人や給料支払官、廷臣たちで賑わい、〈リトル・マン〉は賭博者たちの店である。…

ふつう私たちは二時に正餐に繰り出す。…コーヒーハウスに集まってそれから居酒屋へ行くという次第になる。6時まで居酒屋にいて、それからコヴェントガーデンの劇場に出かける。…芝居の後、上流階級の者は、ふつう、近くの〈トムズ〉や〈ウィルズ〉といったコーヒーハウスに行き、ピケットをしたり、最上の会話を楽しんで真夜中まで過ごす。ここには、グリーンリボンやスターなどという有名クラブの会員の姿も見える。でも、みな地位や身分はよそに置いてきて、お互いに親しく自由に話す。…

もし、女性たちと一緒に過ごしたいなら、邸宅の集まりに行くことになる。コーヒーハウスには、内外のニュースを伝える新聞が幾種類かと、道徳や政治の論を載せた新聞が備えてある。

パリのカフェ

パリのカフェ事始めは、ロンドンとは少し違った。強大だったオスマン・トルコ帝国の駐仏大使スレイマン・アヤが1669年にパリに着任し、同大使の周辺からカフェが流行を始める。大使はヴェルサイユでルイ14世に謁見した後パリに戻り、人々を歓待するのに故国の習慣に従ってコーヒーを供した。トルコとの友好関係を重視する政府高官たちがまずコ

ーヒーの洗礼を受ける。家具調度、壁掛け、装飾等一切がイスタンブールの最も豊かな住まいを偲ばせるエキゾチックな雰囲気である。椅子はなく、床に敷かれたふっくらしたクッションに座り、通訳を介してかつて経験したことのないくつろいだ姿勢でこの家の主と会話を交わす。あでやかなトルコ衣装に身を包んだ召使いたちが、夫人たちにダマスク織の小さなナプキンを差し出し、彼女たちが手にする磁器のカップにコーヒーをついで回る…。かくして、コーヒーはパリの上流社会に広がり始めたのであった。

これをきっかけに、パリでもコーヒーを飲ませる店が誕生する。初期にはコーヒーを知っているアルメニア人やペルシャ人が店を開いたが、これらは粗末な店であり、あまり客は入らなかった。

カフェ・プロコップ フランス風カフェの最初のもつとされるのは、シチリア島出身のプロコピオ・デイ・コルテッリが、モリエール、ラシーヌ等の演劇を上演していた旧コメディ・フランセーズ座（左岸にあった）のまん前に開業したカフェ・プロコップとされる。コルテッリはパリのカフェでボーイをして経験を積み、1689年に劇場前にあったアルメニア人のカフェ（浴場だったという説もある）を買い取ってフランス風に改造した。カフェ・プロコップの起源については、文献によって細部に違いがあるが、次のような事情らしい。アルメニア人で仏名グレゴアールなる人物が、コメディ・フランセーズ座がフォッセ・サンジェルマン通り（今日の旧コメディ・フランセーズ通り）に新設されるに当たり、自分のカフェを劇場前に移転し、観劇に集まる人種を顧客にしようと目論んだ。そのカフェをコルテッリが買い取って、鏡や大理石などをうまく活用し、優美な家具を入れ、それまでカフェといえばトルコ風の内装だったのを、ヨーロッパ趣味を加えて親しみやすい雰囲気に変えた。コーヒーが体に悪いという風説に対抗して、フランスの優れた牛乳を入れて毒性を打消し（カフェオレ）、砂糖の入れ方に工夫を凝らし、心身に良い健康飲料にしまったというのである。コーヒーのみならず、アメリカ大陸からもたらされていたホット・チョコレート（飲み物）やシナモン、ヴァニラなどの香料を混ぜ、砂糖煮の果物などの間食、マラスキノ酒、バラの甘ロリキュールなど、様々なものを工夫して供した。かくして、パリのカフェは男女を問わず、多様な人々が親しんだ。ロンドンのコーヒーハウスが女性に忌避されて消えていった轍を踏まず、コーヒーとカフェを〈生活革命〉にまで育てていったのである。エレガントで居心地のいいカフェ・プロコップは、場所柄ゆえに急速にパリの芸術家や知識人たちの溜まり場になり、その名声と繁盛はコメディ・フランセーズが現在地のパレ・ロワイヤル地区に移転する1770年まで続いた。カフェの数はその後どんどん増えて、革命家や知識人、芸術家などの溜まり場となり、フランス革命でも大いなる役割を果たしたことはよく知られている。ちなみに、カフェ・プロコップは現在も誕生の地に同じ名前で営業している。

個々の特徴あるカフェについては、スティーブ・ブラッドショー（海野弘訳）「カフェの文化史：ボヘミアンの系譜」が楽しい。功なり名遂げた作家、芸術家や上流階級が集うパ

レ・ロワイヤルやグラン・ブールヴァール界隈の有名カフェから、ボヘミアンが好んで集まる場末のカフェに至るまで様々に紹介されている。

ナイトライフと盛り場 海野弘は「レンズが撮った 19 世紀のヨーロッパ」の巻頭記事『時代を輝かせたベル・エポックの都市』で、大都市の裏の魅力を採り上げている。19 世紀の都市は新しい大通りを切り開き、工業化、機械化へと突き進みながら、古いもの、アングラの的なものを置き去りにしようとしていた。しかし、その近代への直進こそが、取り残されていくものへの〈まなざし〉を生んだ。そのことは写真を見れば明らかだという。初期の写真は動くものは写せなかったから、立派な建物や立派な人物のみが写された。いわば絵葉書の世界であった。やがて裏通りの小さなごみごみした家や、名もなき人々の姿が撮影されるようになる。ローソクからガス灯へ、アーク灯から電気照明へと都市の夜は明るくなり、それまで休息と睡眠の時間であった夜にも人々の活動が始まる。近代的ナイトライフの始まりである。大都市の一日は昼と夜に二分され、夜のエンタテインメントが発達する。都市の夜景が新しい魅力をもたらすようになるのである。

空間的にも、高層の建物が増える一方で、横にも生活空間が広がっていく。いわゆる場末や裏通りの盛り場の誕生である。そこでも多くの場合カフェが活動の中心になる。パリの例を見よう。フラヌールと呼ばれる都市遊歩者が、芸術家のたむろす辺りをさ迷い歩き、そこが盛り場と化していく。例えばブラスリー・デ・マルティール。1850 年代に中心地から離れたマルティール通りに開業し、オスマン男爵が強引に造っていく華麗な街並みに反抗し、あえてルイ・ナポレオンが始めたパリ万国博覧会（1855 年）の喧騒を嫌う人たちがここに集った。明るく、合理的で、影のない表に対し、不合理で憂鬱でロマンティックな気分を発散する裏を好む人々も多かったのである。クールベやボードレールら反逆者や、社会の除け者、落伍者、有名無名の芸術家や作家たちが集った。その様は帝政時代のカフェ・プロコープの趣であったという。

同時に夜のエンタテインメントがバラエティに富むようになる。歴代のフランス王は食糧難や暴動の発生を怖れて、パリ市域の拡大を防ごうとしてきた。にもかかわらず、パリはルネサンス期以来ひたすら拡大を続けてきた。ルイ 13 世（在位 1610~43）の時代に西方に市域を拡大したが、1730 年の時点で、まだ市内の人口は 56 万人ほどであった。次いで、ルイ 16 世の時に、膨らんだ市域の外縁地を囲う形で、徴税の境界〈ミュール・デ・フェルミエ・ジェネロー（徴税人の壁）〉と呼ばれる市壁を構築した。この壁は、北はモンマルトルの南麓から西方に向かい、現在のシャルル・ドゴール広場、パッシーの丘を経て、南はモンパルナスの北麓を通り、東側はパリで一番高度の高いベルビューの丘（128m）の下からモンマルトルに戻るラインである。この市壁に沿って 53 か所の市門（課税場所）を設けて徴税した。場末の盛り場はこれら市門の外壁沿いにできていく。都市の諸々の規制を逃れ、とりわけ課税を逃れるためであった。居酒屋やキャバレ、ショーなどを見せる芝居小屋など、ギャングットとかボアート・ド・ニュイと呼ばれる類の施設であり、多数が集まって歓楽の場所となっていく。最初にベルビュー丘の麓のラ・クルティエヌが賑わい、ついで

モンマルトルの麓に移り、モンマルトルに人気が出て飲み代も高くなると、南のモンパルナスへと移動していった。〈徴税人の壁〉はオスマンに撤去されて市域となり、19世紀末からベル・エポックにかけて、モンマルトルやモンパルナスは芸術家の溜まり場として観光客を誘引するようになっていった。

3) カジノ

19世紀の中頃に大きく発展したカジノについても触れておこう。賭事^{ギャンブル}自体は歴史とともに古く、ヨーロッパでもギリシャ、ローマの時代から盛んであったが、コントロールされた賭事となると比較新しく、17世紀に始まっている。それ以前の賭けの勝敗は偶然のみに支配され、胴元に利益が上がるシステムは存在しなかった。そこで、天文学のガリレオ・ガリレイ（1564～1642）、数学者のブлез・パスカル（1623～62）やピエール・ド・フェルマー（1601～65）といった人たちが、王侯貴族たちの依頼で確率計算を行ない、カードでもダイスでもコインの裏表でも、ほぼ常時勝てる方法を考案したことから始まったという。そうした研究が出版され、知識が広がると、すぐさま各地の教会が金細工や宝石を賞品とするロトリー（富くじ）を販売して教会の建設費を募りはじめた。他方、商人たちは1枚の絨毯を2～3百ドゥカート（ヴェネチアの金貨）で売るよりも、1000人に1ドゥカートのリスクの当たりくじ賞品として提供するほうが利益が大きいことを理解した。

カジノ事始め 商業的ロトリーに真っ先に熱を挙げたのはヴェネチアの商人たちだったが、その上を行ったのがヴェネチア政府であった。人々のロトリー熱を公的資金調達に活用できると考え、政府自ら市が所有する不動産や市の役職などを賞品とするロトリーを売り出した。それだけでなく、売り上げの一定割合を貧民救済や他国に囚われている市民の救済に充てることを大義名分に、民間の実施するロトリーの規制を始め、最終的にあらゆるロトリーを政府の管理下に置き、私的ロトリーを禁止してしまった。

しかし、賭け事の禁止は、よく言っても効果がなく、むしろ禁止されたとたんにダイスやカードによる賭博が至る所で行われるようになり、リアルト地区の貴族らはひそかにプライベート・クラブをつくって違法のギャンブルを行う風潮がはびこった。

ヴェネチア共和国政府は全面禁止は不可能とみて、1638年春のカーニヴァルに際し、元は教会だった「モーゼ宮」の一部を改造して公営ギャンブルを始め、この場所を「イル・ドット」（隠れ家）と呼んだ。これが世界初の公営賭博と言われている。カジノ **casino** という言葉は **casa**（家）の小さなもの、あるいは質素な家といった意味であるが、イル・ドットは小さくもみすぼらしくもなく、むしろ4階建ての巨大建造物で、大広間が沢山あり、ローソクがふんだんに灯るシャンデリアで明々と照らされていた。ここでプレイするには、フォーマルな服装に三角帽子や仮面をかぶることが条件とされ、賭け金は高額で、上流階級以外がプレイできる場所ではなかった。しかも、見物するだけの客からは入場料を取り、供される飲み物は有料であったという。市は大いに稼ぎ、1768年にイル・ドットは拡大の限界がきて、第二の「イル・ドット」を開業し、そうした場がいつしかカジノと呼ばれる

ようになった。かくして、カジノはヴェネチアになくなくてはならない公営企業となったが、1774年のジョルジョ・ピザーニの市政改革で廃止され、それ以後ヴェネチアでは、カジノは全面禁止となった。

フランスのカジノ イタリアで盛んになれば、隣国フランスに広がるのは自然の成り行きである。当初王侯貴族は、自分たちは賭け事に熱中しながら庶民にはこれを禁じ、無断で行えば破廉恥罪で厳しく罰せられた。とくにヴェルサイユのルイ 14 世の宮廷では、ギャンブルが日常のゲームとして遊ばれていたという。しかし、次のルイ 15 世（在位 1715～74）は制限付き容認の方針を取り、パリにはカジノの元になる賭博場があちこちにできた。フランス革命の時期、革命の指導者たちは賭け事を禁止せずに放任していたが、ナポレオン帝政期にカジノ規制を復活させ、場所を限定して開業を容認した。この時期に隆盛を誇ったのがパレ・ロワイヤルのカジノであり、最盛時には、地下も含め 100 室で賭博が行なわれていたという。1806 年に「温泉場で、シーズンのみ」の条件で追加容認され、地方にも広がっていった。

ピューリタンの伝統の強い英国は、1814 年に「ゲーム法」(Gaming Act) によって金銭賭博を禁止したし、フランスの七月王政（1830～48）も一転して 1838 年の法律によって全面禁止としたから、当時パレ・ロワイヤルにあった 18 か所のカジノも閉鎖された。折からヨーロッパの富裕階級が夏場に温泉場で過ごす風潮が広がった時期であり、ライン川沿いの貧しいドイツ諸侯にとって、フランスのカジノ禁止は僥倖であった。パリで賭博事業の経験を積んだ連中が、バーデンバーデンなどのドイツの温泉場に転出してカジノを繁栄させたからであった。

その後、モナコがドイツからカジノ事業者を招いてヨーロッパ随一のカジノをモンテカルロに建設するが、いずれにしろ、リゾートのカジノは貴族と富裕階級だけの遊びにとどまっていた。そうした経緯はテーマ論集の「避寒リゾート『コートダジュール』の誕生」に詳述したので、そちらを参照して頂きたい。

3. 万国博覧会の開催：その意義と影響

大都市が成長するにつれて、人々の楽しみが増える。劇場が作られ、公園や遊歩道が整備され、繁華街にはデパートができ、ショーウィンドーが並ぶパサージュ（屋根つき商店街）が誕生する。博物館・美術館・動植物園などの常設展示場が、古美術や絵画、ヨーロッパにはなかったアジアやアメリカからもたらされた珍しいものを集め、それらを一般公開することによって、人々の興味と関心を刺激した。そうした時代の変化を象徴するのが万国博覧会の開催であった。ここでは、19 世紀中ごろに始まり、旅行を大いに促進したイベントとしての万国博覧会について考えてみよう。

内国産業博覧会から万国博覧会へ

近代ならでは「博覧会」のコンセプトは、フランスの内国産業博覧会によってもたらされた。フランス革命は、民衆というものを生み出した革命でもあった。総裁政府は、革命による混乱でイギリスに大きく水を開けられたフランス産業の振興のために、1798年9月、5日間の予定で最初の内国産業博覧会を開催した。目的はフランス産業の各種製品を一般市民向けに展示し、優秀な製品の開発と生産を奨励することにあつた。革命は生産活動を阻害してきたギルド制度を廃止し、職業の自由を達成したから、出展者の応募条件は、営業免許状の提示などで本人確認ができ、自らの生業とする商品であれば何でもよく、優れた商品に対しては権威ある審査委員会によって1等と2等のメダルを授与するとされた。公募期間が短かったにもかかわらず、フランス全土から百十にのぼる出品希望が集まり、自慢の新案特許や発明品がシャン・ド・マルスに仮設された「産業神殿」に並べられた。モンゴルフィエ兄弟発明の熱気球などのアトラクションもあり、催しは大成功で、会期を延長せざるを得ないほどの人気であった。この成功によってフランスは、ロンドン万国博覧会が開催される前の1849年までに、規模を拡大しつつ11回もの内国産業博覧会を開催した。

とくにロンドン万国博覧会前としては最後の1849年の内国産業博覧会は、会期が6カ月におよび、出展総数4532点、アルジェリアをはじめとする海外植民地からの参加も得て、準万国博覧会といえる規模に達していた。実際に1849年の博覧会開催に当たって「万国博覧会」とする提案もなされたのだが、工業の実力がイギリスに劣るため、保護貿易に固執する商工業者や地方行政府の反対にあつてつぶされている。そもそも、内国産業博覧会の開催趣旨がイギリス工業製品の流入を恐れて自国の産業振興を図るのが目的であつたから、その反応も当然と言えば当然であつた（吉見俊哉「博覧会の政治学」p32）。逆にイギリスでは、産業の発展は著しかったが、産業博覧会のような大規模展示会はなく、民間による小規模な発明展などで商品展示が行われていたにすぎなかった。

ヴィクトリア女王の夫君アルバート公のイニシアティブによって、初の万国博覧会（1951年）開催の荣誉はロンドンのものとなった。実際問題として、この時点で世界に呼びかけて国際的な産業博覧会を開催する力を持っていたのはイギリスだけであつた。だが、ひとたびロンドンで華々しく万国博覧会が開かれてみると、むしろフランスのほうが万国博覧会の開催に熱心であり、ロンドンは1855年に二度目の万国博覧会を開催して打ち止めにしているのに、フランスはこの後80年ほどの間に6回も万国博覧会を開催している。

鹿島茂「絶景、パリ博覧会」によれば、1798年の第1回内国産業博覧会は、規模は小さいし、国際博覧会でもなかったが、以後の万国博覧会の基本的性格がすべて出そろつていて、この産業博覧会の特徴を次のように列挙する。

- ①政府が産業振興のために主催するものであること
- ②展示されるのは実用目的の商品であり、しかもその商品は販売されるのではなく、展示されるだけであること
- ③アトラクションやスペクタクルを伴う祭典であること
- ④一つの会場に全ての展示品を集めること

- ⑤出展者の資格がほとんどフリーであり、私企業ないし私人であること
- ⑥単なる展示会ではなく、商品のコンクールであること

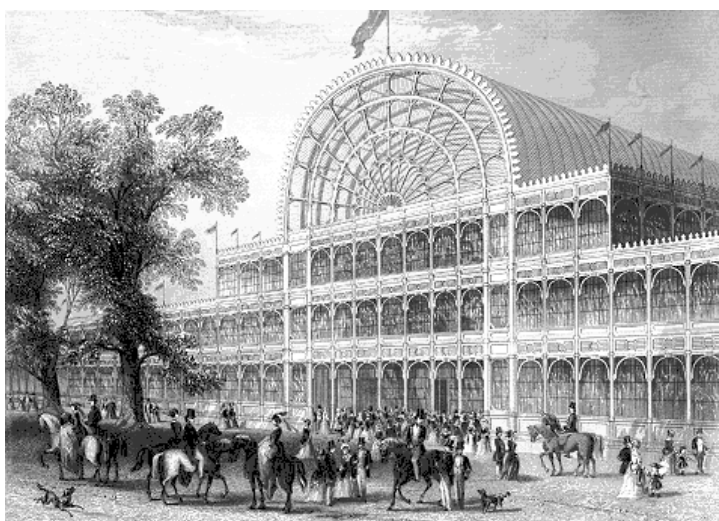
博覧会の原語は **exposition** であり、本来絵画や彫刻の展覧会、つまり《見せる催し》の意味で使われてきた。鹿島は、産業博覧会を **exposition** としたのには明確な意味があるという。ひとつは、博覧会の企画者フランソワ・ド・ヌシャトーが述べているとおり、芸術作品の展覧会 **exposition** については、フランスはすでに充分責務を果たしてきたから、今回は実用工芸品に特化した博覧会 **exposition** とするという点にあった。また、産業博覧会 **exposition** は、それ以前に自然発生的に生まれてきた取引の市（**foire** フェア）とは根本的に異なる催しであり、芸術品等を見せるように実用工芸品、すなわち商品を見せることが目的であって、売ることは目的でないことを明確にしていた。

産業博覧会の長い経験を有するフランスは、初の万国博覧会開催はロンドンに譲ったが、ロンドン万国博を追いかけるように、1855年に万国博としては二度目、フランスでは初めての万国博を開催する。このあとロンドン（1862）、パリ（1867）、ウィーン（1873）、フィラデルフィア（1876）、パリ（1878）、パリ（1889）、シカゴ（1893）、パリ（1900）、セントルイス（1904）、サンフランシスコ（1915）、シカゴ（1933）、パリ（1937）…というように、国家的な祭典として万国博が繰り返し開催されていく。

第1回ロンドン万国博覧会の衝撃

1851年、ロンドンのハイドパークで開催された初の万国博覧会が社会に与えた衝撃は大きかった。まず人々の目を見張らせたのは巨大な展示会場クリスタル・パレス（水晶宮）の威容であった。博覧会当局は、会場となる建造物のデザインを、仮設であること、単純な構造、安くかつスピーディーに建造できること、などを条件に公募した。これに対し、外国からの38件を含む245件ものエントリーがあったが、委員会はすべてを不合格とした上で、開催予定日が1年後に迫る1850年6月になって、委員会が独自に作成したプランを発表した。伝統的なレンガ造りの建物の上に、直径66メートル、高さ45メートルの大ガラス・ドームを乗せた構造で、建設費が巨額になりそうであった。この重苦しい建築プランは一般に不評だった上、ハイドパークの緑が失われ、公園に建てる仮設建造物としては不適格とみなされた。時間は迫っており、万国博覧会の開催自体が危ぶまれる状態に陥っていた。この危機を救ったのが温室設計で名高い庭園設計士ジョセフ・パクストン（1803～65）であった。電気照明のない時代だから、昼光を採り入れるために、鉄骨とガラスだけで巨大な建造物を組み上げる設計で、はるかに安く、かつスピーディーに建造可能な案を提供した。パクストン案は歓迎され、一発で採用された。雑誌『パンチ』がクリスタル・パレスと呼んでこれが通称になった博覧会場の構造物は、3800トンの鋳鉄と700トンの錬鉄、30万枚のガラス、60万立方メートルの木材を使用し、プレハブ工法によってわずか6カ月で完成してしまった。クリスタル・パレスは温室の延長上にある建物といってよく、影を持たない明るい空間であった。採用に至る経緯からパクストンのクリスタル・パレスは偶

然の所産と言われてきたが、吉見俊哉は、その背景には鉄とガラスの大量生産を可能にしたイギリスの工業力の発展があったと説明したうえで、ここに至るパクションの経歴を説明し、むしろクリスタル・パレスの登場は必然であったと述べている。パクションがデヴォンシャー公爵のチャッツワース城の庭園管理を任されていたことは、トマス・クックが万国博への誘客に係わった説明の際に言及したが、彼はすでに大きな温室をいくつも建設して名を知られており、とくに 1836 年から 4 年がかりでチャッツワースに建造した大温室は、長さ 84 メートル、幅 37 メートル、中央は高さ 20 メートルの円形屋根という巨大なもので、ヴィクトリア女王がここを訪れた際には、馬車で内部を疾走したと伝えられているほどである。



クリスタル・パレス

さて、初の万国博では、92,000 m²の展示スペースに、14,000 の国内外からの出展者によって、人類が発明した様々な産業機械、外国から出展された諸々の珍しいものが通路に沿って所せましと並べられ、人々はそれぞれの興味に従って自由に見て回った。フランス革命と産業革命という二大革命がもたらした新時代「近代」を最もよく象徴するイベントであった。ナポレオン三世の懐刀といわれ、パリの第 1 回万国博（1855 年）と第 2 回万国博（1867 年）を主導したミシェル・シュヴァリエ（1806～79）は、この第 1 回ロンドン万国博を視察して、クリスタル・パレスについて次のように賞賛している。

……クリスタル・パレスは壮麗でいて便利である。光に満ち溢れているが、いささかの厳しさもない。すべてが前もって予測され、どれほどの大雨が降ろうと、また火災が起きようとなんの心配もない。（……）世界中のどこにも、その規模といい、建築様式といい、類推を可能にするものはない。（……）こうしたすべてが数か月の間に立案され、採用され、鋳造され、調整され、設置され、そしてあらゆる部分にガラスがはめられた。そして、妖精の国にいるかと思いがうほどのものが出来上がったのである。（「絶景、パリ万国博覧会」より）

また、展示された《機械たち》は、自然博物館の恐竜さながらにシュヴァリエを圧倒した。会場に展示されていた機械類は、テクノロジーの未熟さゆえに例外なくとてつもなく巨大であった。その巨大な鉄の塊、機械の圧倒的な実在感が見る者の度肝を抜き、「産業による人類の進歩」を否応なく納得させたのであった。鹿島 p 70

シュヴァリエは、1849年、ナポレオン大統領（当時）の同意のもとに、内国産業博を万国博覧会にしようと提案しながら受け入れられなかった悔しさがあつた。鹿島によれば、シュヴァリエは第1回ロンドン万博の展示に圧倒されながら、ロンドン博には主導的理念が欠けていることを知って安堵もしてもいたという。1851年ロンドン万博は「産業の振興による人類の進歩」という統一スローガンを一応掲げてはいたが、どのような産業社会を理想像とするかという点は示されておらず、そのことは鉱工業、農業、商業という諸産業のうち、扱っているのが鉱工業だけであつたことから明らかであつた。

ともあれ、1851年のロンドン万国博覧会が及ぼした影響は巨大であつた。何よりも、パリやウィーン、フィラデルフィアなど各国の大都市で、それぞれ国威をかけてロンドンに匹敵する万国博覧会が次々に開かれるようになり、数年に一度、時代の先端を行く発明や様々なお国自慢を集める万国博覧会を開くことが恒例になったことに窺える。とくにフランスでは、ロンドン万博直後の1851年12月にクーデタを起こし、翌1852年に皇帝位についたばかりのナポレオン三世が、産業博覧会の経験を活かして直ちに1855年にフランス初の万国博覧会を開催すると決め、以後パリは他を圧する博覧会都市となつたのであつた。

第1回パリ万国博の理念

初のロンドン万国博覧会の英語名称は **The Great Exposition of Industry of All Nations** とされた。ちなみに、ロンドン万国博の展示は次の6分野に整理されていた。（「絶景パリ万国博覧会」より）

セクションA	鉱物および化学原料
セクションB	機械
セクションC	工業製品
セクションD	ガラス等の工芸品
セクションE	家具及びその他の建築資材
セクションF	絵画を除く美術

シュヴァリエは、ルイ・ナポレオンが1851年12月のクーデタによって皇帝ナポレオン三世となつたのをいち早く支持し、ナポレオン三世の経済顧問に任命され、1855年のパリ万博の開催準備を担当した。シュヴァリエは、ロンドン万博のグレート・エクスポジションという名称に対し、パリではエクスポジション・ユニヴェルセル **Exposition Universelle** とした。その心は、鉱工業のみならず、農業や商業などすべての産業を扱い、さらに、機械や生産物など形あるものばかりではなく、人間に係わりのあるすべて、地球上にある万物を集めて展示するという意味でユニヴァーサル（万有）としたのであつた。

ただし、パリ万国博の開催準備は遅れた。1854年にクリミア戦争が起こって準備組織の陣容に影響が出たことと、オスマン・セヌ県知事による大々的なパリ改造事業が同時進行したため、技術者や建設作業員の不足で工事が予定通りに進まなかったのが原因であった。予定より2週間遅れの5月15日に開会したものの、いくつかの会場はまだ建設工事中で、ばらばらに開会するという不手際となった。それでも、夏に完全オープンすると、地方や外国から続々と観客が集まり、万国博覧会にふさわしい盛り上がりを見せた。かくして、パリの第1回万国博覧会は1か月会期を延長して10月末日まで開催し、入場者はロンドンより少ないが、516万人に達した。11月15日に開催されたコンクールの褒章授与式には4万人の関係者が集まり、合計1万1000人の出展者に金・銀・銅メダルおよび選外佳作の賞が授与された。

パリ万国博がロンドンのそれと異なる点について、鹿島は以下の点を挙げている。第一は、動く機械による実物教育としたこと。ロンドン万博で機械類は会場の様々な場面に散らばって22,000㎡の空間を占めていたが、その場で作動可能な機械が占めた面積は3000㎡に過ぎなかった。1855年パリ博では、機械は出来る限り動く状態で展示するという方針が掲げられた。そのため、出展者用ボイラーの設置個所が定められ、委員会が燃料を供給して機械を観客の前で作動させることにした。ロンドンでは巨大な蒸気機関や水力機械が、博物館の恐竜さながらに静止状態で展示されていたが、パリ博では実際に機械が作動し、有機的に組み合わせられて「生産物」を生み出していく過程を見せた。そうすることで見学者が「人間による人間収奪に代えて、機械による自然の活用をおく」というサンシモン主義の理想を理解するであろうと考えたからであった。蒸気船や蒸気機関車などの大型機械は、セヌ川沿いに作られたアネックス展示館に集められ、実際に動いているところを見物できた。館内は騒音でうるさく、温度は高く、埃が立ち込める状態だったが、最も目立ち、最も人を驚かせ、最も教育的な展示となった。機械の実用性を強調した結果、実用性以上に機械そのものが発するオーラの物神性に人々は捉えられたのであった。

第二は、個人や私企業が発明・開発した優秀な「商品」を一か所に集めて展示することによって、生産者や流通業者らを刺激し、それぞれの利潤追求の欲求を加速させたことである。産業振興の立場から発想された博覧会である以上、博覧会を明確に商品の競争の場として意識させるため、審査委員会の厳正な審査によって出品物の優劣を判定し、優秀作品には金・銀・銅のメダルが与えられた。優秀作品の表彰は、1798年の内国産業博覧会でも、第1回のロンドン万国博でも行われた。しかし、第1回パリ万博では、褒章に権威を持たせるために各セクションの審査委員会に高度の知識を持つ専門家を集め、審査委員会規定や評価基準を前もって詳細に定め、委員の恣意に流されないよう配慮した。しかも、審査委員会はフランスと外国との合同体とし、委員構成もそれぞれのクラスの出品数に応じた比例配分として公平を期した。ところが、ふたを開けてみると、慎重なる審査を要請しておいたにもかかわらず、それぞれのクラスの審査委員会から推薦された金メダルの数は、委員会の予想をはるかに上まわってしまった。200を超える金メダルを銀メダルに降格

させることまででしたが、すでに帰国してしまった外国人審査委員もいて、審査のやり直しは不可能であった。それゆえ苦肉の策として、金メダルの等級を、大金メダル（グラン・プリ）と小金メダル（優等メダル）の二種に分けたのであった。結果は、産業部門のメダル数は大金メダル 112、小金メダル 252、銀メダル 2300、銅メダル 3900、選外佳作 4000 となった。メダル獲得者が自社製品の宣伝文句に「パリ万博グランプリ受賞」などと謳ったから、出展しなかった者が悔しがったのはいうまでもない。鹿島はこの褒章制度がいかにその後の商品の質の改善や新製品の開発に効果を発揮したかを詳細に語っている。それは省略するが、この時のグランプリを得て、世界ブランドに飛躍していったフランスのメーカーに、ガラス細工のバカラ、銀食器のクリストフルなどがある。

第三の特徴は、価格明示の原則である。委員会が金メダル授与の条件として挙げた四つの条件のうち三つまでは、教育的見地、完成度の高さ、実用化の可能性など、商品の質に係わるものであったが、第 4 の条件は価格であった。すでに知られている商品の価格が下がることで、広範な消費者に利用の道が開かれるのが狙いであった。1851 年ロンドン万博は価格表示を禁止したのに対し、1855 年パリ博では、出展者は価格を訊ねられたら掛け値なしの正価を答えなければならないとされ、価格表示を望む者はあらかじめ許可を得た上で表示できるとした。言い換えれば、価格が審査の重要基準とされたのである。これは商品流通上の大変革につながる方針であった。というのは、出展側には価格公表に大きな抵抗があったからである。当時の商習慣では、売る側は出来るだけ高く売り、消費者はできるだけ安く買おうとする駆け引きで商売していたので、正価を掲示することは前もって消費者に価格を教えてしまい、売り手が戦いを放棄するに等しいと考えられたからである。

方針はよかったが、結果は成功とはいえなかった。委員会の指示が、掲示価格を生産価格、卸売価格、小売価格のいずれとするかを明示していなかったために、結果として価格という判断基準が無意味になってしまったのである。シュヴァリエらサンシモン主義者の商業コンセプトからすると、掛け値なしの正価を掲げることは、公正な商取引による産業社会を導くために欠かせないことであった。シュヴァリエは価格表示を出展者の任意としたことを厳しく反省し、価格の強制表示に至らねばならないこと、商業は文明の原動力であり、公開の原則によってその役割の高みを極めるべきであることを改善点として報告書に記載した。P 120

第四の特徴は、価格表示と関連するが、既設の展示グループ（産業 7 グループ 27 クラス、芸術 1 グループ 3 クラス、合計 8 グループ 30 クラス）のほかに、「家計のための製品」を 31 番目のクラスとして急きょ追加展示したことである。9 月 15 日から 30 日までのわずか 2 週間であったが、この展示はシュヴァリエ自身が審査委員長を買って出ただけでなく、価格表示を義務付けた。シュヴァリエがこの 31 番目のクラスへの出展を呼びかけた商品のリストは次のようなものであった。

住宅、家具、ベッドおよび寝具、時計、書籍、版画および紙、事務用品、楽器、衛生器具、金物、暖房用品および燃料、照明器具、ナイフ・フォーク・スプーン、包丁、

陶磁器およびガラス器、雑（サービス）、食料品（パスタおよび穀類、野菜および根菜、パン、砂糖およびビスケット、牛乳およびチーズ、からし・塩・油および酢、果物およびジャム、チョコレート、ブドウ酒、肉）、石鹼、綿製品、毛織物、既製服および靴

要するに、下層民衆が文明的な生活をする手助けとなる製品であれば、衣食住すべてのジャンルの製品の出品が可能であった。珍しいものの見物ではなく、普段使っているものの比較検討を可能にすることを目的としたこの展示は、押すな押すなの大盛況となった。庶民が使用するものは値段が安いことが重要だが、低価格であればよいというわけではなく、品質を犠牲にしたものであってならなかった。低賃金の結果生産されたものではなく、産業が生産手段、素材、人員に関して改良を加えた結果の低価格でなければならなかった。大量生産することによって価格を下げ、消費者に還元されて生活を豊かにすると同時に、労使がともに潤うシステムが開発されていることを高く評価し、また、そうすることを奨励するのが目的であった。

このクラスの開設は、国家の指導者が求めている商品像が分野ごとに示され、努力目標が明示されたという意味で、極めて大きな意義があった。消費者は万博で展示品を見比べることによって、新時代の生活の在り様を体感することができたのである。

そうはいっても、時はまだ 19 世紀の半ば、博覧会の指導理念を真に体現していた分野といえば、製造工程の機械化が最も進んだ衣料品の分野くらいで、中でも注目を集めたのは既製服であった。19 世紀の前半は、衣服は仕立屋にあつらえてもらうものであって、その費用を賄うことができない庶民は古着で我慢するしかなかった。したがって、低価格で既製服が売り出されれば、すぐにでも買いたい人々の潜在度は極めて高かった。当時パリの大型衣料品店であった「ベル・ジャルディニエール」の経営者パリソーは、第 25 クラスの〈既製服〉に出品した男性用既製服で金メダルを獲得しただけでなく、第 31 クラスの「家計用日用品」の既製服セクションでも参考特別賞を与えられ、彼の店の既製服はいち早くフランス中の下層階級にあまねく知られるようになった。北山晴一「おしゃれの社会史」が、この万博でのジャルディニエールの出品の様子を記述している。鹿島の「絶景、パリ万国博」がそれを引用しているので、同じ個所を以下に紹介させて頂く。

この特別会場でとりわけ入場者の注意を引いたのが既製服業界の大手〈ベル・ジャルディニエール〉であった。この店は久しい以前からヨーロッパ中に名声を響かせていたが、今回もまたその値段の低さで人々の度肝を抜いた。(……) パリソーはあまり財布の重くない人にも十分手の届く品物を豊富に陳列した。陳列品は、仕事着、日常着、晴着の三種類に分かれ、安いものではパルト *paletot* と呼ばれる上着が 4 フラン 75 サンチーム、ウールのズボンが 5 フラン、中級品になるとズボンが 20 フラン、フロックコートが 60 フランといった値段だった。パルトは普通注文服の店では 25 フランしていたもので、4 フラン 75 サンチームという価格は、注文服の仕立ての手間賃（5 フラン）にも満たなかった。

前述のとおり、ベル・ジャルディニエールは第 25 クラスで金メダルを獲得したのだが、金メダル授与の理由に、同社の「理想の経営組織」を挙げていることは注目に値する。審査委員会は、低価格の工業製品を大量生産する企業家だけでなく、低価格・高品質の商品の大量生産を可能にする経営努力をした営業体（商店）をも褒章の対象としていたのである。このことは衣料品店だけでなく、パン屋や肉屋、さらには価格の大幅引き下げに成功した出版社、版画商、レストラン、公衆浴場、ガス工場、労働者用低家賃住宅なども家計を助けるのに貢献したとして努力を称えたのであった。産業革命は機械による大量生産を可能にした革命であったが、生産された商品の流通革命を促したのは博覧会であった。

フランスのモード産業の誕生と発展

1855 年の第 1 回パリ万国博覧会は「万有博覧会」であり、ありふれた日常生活用品の展示は、観客の興味を引かないどころか、大変な人気を集め、多彩な商品を自由に見て回れるという新鮮さが際立った。繰り返しになるが、こうした流通の革新を担ったのは、衣料品の分野であり、これを現実の流通に応用したのがアリストイド・ブシコーの百貨店である。19 世紀前半に流行の女性用衣料品や小間物を販売する《マガザン・ド・ヌヴォーテ》（新物の店）が誕生し、そこからボンマルシェという初のデパートが誕生していく過程を通じて、モードの国フランスの名声が確立し、これが観光客の誘引にも大きな一役を買うことになる。その経緯を北山晴一「おしゃれの社会史」と鹿島茂「デパートを発明した夫婦」の 2 書を中心に見てみよう。

衣生活の自由化 フランス人にとって衣の生活が重要な意味を持つようになったのはフランス革命以後のことである。それ以前は、作る人、売る人、着る人という衣生活の三当事者のいずれにも自由がなかった。作る人と売る人に自由がなかったのは、旧制度下では、それぞれの分野の協同組合（ギルド）の成立によって初めて職業として認められることになっていた。業種ごとに厳しい区分が設けられていて、他の業種への逸脱、例えば仕立屋が生地や飾り物の分野に進出してはならなかった。素材を売る者と素材を加工する者の区分はとくに厳重に監視されており、仕立屋は生地を売ることも貯蔵することも許されなかった。他方、生地屋のほうは自ら生地に加工することを禁じられていた。したがって、客は服を作りたい時はまず生地屋に行って必要分の生地を買い、ついで小間物屋を回って飾り物を買って、すべての必要物を揃えてはじめて仕立屋に行かねばならなかった。既製服は存在する余地がなく、仕立屋は加工賃だけを商っていた。「着る人」の不自由は、身分別に着てよいもの、着ることを許されないものが勅令によってはっきり決められていたからである。

これら旧制度下の職業上の制約を全面的に廃止したのが、1791 年 3 月 2 日付アラルド政令 *decret* と、同年 7 月 14 日付のル・シャプリエ法である。まずアラルド政令によって、市民は誰でも営業免許証を得て規則に従うかぎり、自ら欲するいかなる職業に就いてもよいことになり、次いで、ル・シャプリエ法によって、それまでの「同身分、同職業の市民に

よるあらゆる種類の同業組合の廃止」が決められ、以後すべての市民が自由に職業を選び、営むことができるようになった。そして、2年後の1793年に旧制度による衣服令が廃止され、「性別を問わず、何人といえども、いかなる市民男女に対して特定の服装を強いることはない。各人は、自ら可と考える自己の性の衣服および付属物を自由に着用することができる」と明記され、着衣の自由が保証された。

既製服の登場 革命政府は共同組合の制度を廃止して職業の自由をもたらし、内国産業博覧会を開催して産業の振興を図った。その効果の一つが、それまで禁止されてきた「既製服」産業の誕生とそのめざましい発展である。それは衣風俗ばかりでなく、社会史一般の観点から見ても、19世紀的諸変化を象徴する出来事であった。パリで既製服が売られ始めるのは1820年頃からであるが、それ以前にも既製服が全くなかったわけではなく、19世紀初頭には、パレ・ロワイヤルの回廊に店を並べていた有名な仕立屋が、地方や外国からの旅行者を対象に、「既製服と24時間のスピード仕立ての服売ります」という看板を掲げていたことがわかっている。もっともこれは、既製服の特徴である安さとはかかわりのない商品であった。逆に自由に既製服が作れることになった当初は、古着屋地区などでタコ部屋のような場所に詰め込まれた未熟な縫い子たちが、大量に既製服を作らされていたという。こういう場所では、労働者向けの質が悪くて安い仕事着を大量生産していたのだが、以前労働者は一枚の衣服を年中着ていたことを考えれば、それでも大いなる進歩であった。1820年代にぼつぼつともな既製服を販売する店が登場するが、七月革命(1830年)以後庶民の生活改善意欲が高まり、軍隊と学校で制服の着用が始まると、既製服への抵抗感がなくなり、急速に発展を始める。既製服はまず男性用の衣服から始まり、1860年代になると、パリは女性服モードの頂点に立つのである。

さて、1840年代に入ると、裁縫・裁断技術が発達するとともに仕事の合理化が進み、既製服が大きく発展する。職人の勘だけに頼っていた仕立て技術を、合理的、普遍的で、誰にでもわかる方法で普及させていくのである。1855年の万国博はこのような背景のもとに、既製服を主要産業のひとつとして採り上げたのであった。ちなみに注文服の方は、1855博覧会では、生地生産にかかわっていないという理由で参加を認められなかった。

マガザン・ド・ヌヴォーテ ヌヴォーテとは〈新しいもの〉を意味する。女物の布地や小間物などの流行品を取り揃え、ショーウィンドーを広くとり、商う商品が一目でわかるようにした新型の商店である。革命前の店では、看板があっても商う商品を見せる必要がなく、したがってウィンドーはないに等しかった。中は薄暗く、天井は低く、奥の方に店員が獲物を待ち構えるように控えていて、一度入ると買わずに出てくることは容易でなかった。買う方も、どうしても必要なものだけを近所の商店で買うという時代であった。それに、パリ市内の道路の整備が遅れていて、買い物に遠出すること自体が困難であった。

ところが、新型店舗のマガザン・ド・ヌヴォーテは、初めから近所の客だけでなく、不特定多数を相手とするコンセプトによって誕生した商店であった。明るくて大きなショー

ウィンドー、広々とした店内、棚に整理された色とりどりの布地や衣服や小間物、それらを効果的に演出する眩いほどの照明、そして何よりも値段を示す正札が掲げられていた。北山によれば、ウィンドー・ショッピングができることは、見るだけの「間接消費」を盛んにし、これがモードの発生につながったという。

歴史的には、パサージュの登場が始まりである。パサージュの語義は〈通行〉であり、通路とか抜け道の意味で使われ、単独に使うと屋根つきのアーケード商店街を指すことが多い。要するにウィンドー・ショッピングができる場所である。この種の通り（パサージュ）の嚆矢は、ブルボン王朝傍系のオルレアン家五代目当主レイ・フィリップ・ドルレアンが1784年に自身の居館パレ・ロワイヤルを改造し、1階部分に回廊をめぐらせてつくった商店街がそれである。列柱に囲まれた回廊のおかげで客は雨風にさらされることなく、ずらりと並んだ店舗のウィンドーを冷やかしながら散策できた。それまでパリの各所に散らばっていたファッション関連の店も数多く出展したので、回廊を一回りすれば流行の品々を観察することができた。品物を買う気がない人でも気楽に足を運べる場所として人気を集め、フランス革命前後の時期やそれ以降も、回廊にあるカフェやレストランは人々のたまり場になっていた。

パサージュは、これと同じ効果を狙ってつくられた商店街で、18世紀末から1840年代にかけてパリの各所に建設された。ガラス屋根で上を覆われているから、安心してウィンドー・ショッピングができた。ちなみに、ガス灯は1816年にパサージュのひとつ〈パサージュ・デ・パノラマ〉に設けられたのが最初で、1830年代に入ると、主要な盛り場で使われるようになった。オイル・ランプとはくらべものにならない明るさで、ガス灯の普及がいちだんとウィンドー・ショッピング熱を煽ったという。鹿島茂 p22

マガザン・ド・ヌヴォーテが誕生した裏には、パサージュでのウィンドー・ショッピングに慣れ、こういう店が受け入れられ望まれる素地ができつつあったほか、市内交通が整備改善されたことが背景にあるのだが、交通については後述する

もっとも、マガザン・ド・ヌヴォーテは、入店自由と謳ってはいても、ショーウィンドーの前をぶらつくように、中に入って売り場を気楽に歩きまわるとまではいえなかった。いったん商品を手にとれば、たとえ定価は決まっても、あとは旧来の商店同様、店員との一対一のやり取りになり、何も買わずに出てくるのは難しかった。一方、商品の仕入れや販売方法は、旧来の店とはっきり違っていた。不特定多数の客を相手にするために、まず〈つけ売り〉をやめて現金商売にした。返品も認めることとしたが、これは商品に自信がなければできないことであった。現金商売にすることで短期の手形で仕入れることができ、問屋経由だけでなく製造業者から直接仕入れる道も開けていった。かくして、マガザン・ド・ヌヴォーテはいくつもの新しい流通方法を採用入れたのだったが、まだ需要供給ともに未成熟の19世紀前半のフランス社会では、資本の循環にスピードがともなっておらず、今一つ効果が上がらなかった。直接大量仕入れを行っても、商品が寝ている期間が長ければロスが出て、思ったほどメリットがない。それに、まだ本格的産業革命の前段階

で、布地の製造技術にむらがあり、高級品と廉価品との差があり過ぎた。工業生産品のほうは安く売ることができたが、高級品は従来の衣料品店とさして変わらず、やや時期尚早であったとも考えられる。1855年パリ万国博は、そのような情勢の打開に大きなきっかけを与えたのであった。

デパートの誕生 衣料品主体からもっと手を広げて、分野（デパートメント）別に分けて多品種を並べて販売するのが百貨店（デパートメント・ストア）であり、フランスでは大きい店（グラン・マガザン）といった。産業革命が進み、大量生産できる品種が増えてはじめて薄利多売の商売が可能になる。マガザン・ド・ヌヴォーテの時期を経て、広大な売り場面積に多様な商品を並べ、自由に品定めをして選べるデパートが登場してくるのが、ちょうどロンドンとパリで万国博が開催される19世紀中ごろであった。鹿島茂「デパートを発明した夫婦」は、こうしたパリの流通革命の展開を、パリ初のデパート「ボンマルシェ」を創業したアリスティード・ブシコー（1810～77）の生き方を追求することによって巧みに描いている。バルザックやゾラが現実の生活を活写した小説に登場するマガザン・ド・ヌヴォーテやデパートの生き生きとした描写なども引用しつつ、ファッションの町パリが突出していく様が窺われる。

ブシコーは1810年、ノルマンディー地方の帽子屋の息子として生まれ、父の店の店員として働いたのが経歴の出発点であった。18歳でパリに出て、フォーブール・サンジェルマン近くのバック街にあったマガザン・ド・ヌヴォーテ「プティ・サントマ」の店員として入社した。当時、通常の個人商店では縁故や地縁によって住み込みの丁稚奉公から始めるのが普通だったが、新興のマガザン・ド・ヌヴォーテは常時数十人程度の店員を雇用していた。とくに即戦力になる接客態度のよい人材を求めていたから、縁故も地縁もなかったブシコーにとって幸いであった。「プティ・サントマ」では、働きながら貪欲な研究心でマガザン・ド・ヌヴォーテの経営を勉強し、1835年、チーズ店の経営を任されていた5歳年下のマルグリッド・ゲランと結婚した。マルグリッドは以後ブシコーの大切なパートナーとなる。1845年にブシコーは売り場主任に昇進していたのに、「プティ・サントマ」の廃業によって職を失う。ところが、折よく近くのセーヴル街とバック街の角にマガザン・ド・ヌヴォーテ「オー・ボンマルシェ」を開業したばかりのヴィドー兄弟に雇ってもらうことができた。3人は意気投合し、協力して新しい販売方法を試みることにした。出居入り自由、定価販売、通信販売、バーゲンセールの実施、などなどであった。1852年、ブシコーはそれまでの蓄えと田舎の相続遺産を売却したものをつぎ込み、総額50,000フランを投じてヴィドー兄弟と合名会社を設立し、翌1853年6月1日、新しいマガザン・ド・ヌヴォーテ「オー・ボンマルシェ」が開店した。従業員12人、売り場は四つ、年間売上高は45万2000フランという規模であった。マガザン・ド・ヌヴォーテとして比較的小規模の店だったが、のちの展開から、会社設立の1852年をもってデパート誕生の年とされている。

ここからスタートして、ブシコー夫妻は女性客を楽しませるべく、自由に商品に触らせ、店内に華麗な装飾を施し、相談相手としてよく訓練した店員を多数配置した。ブシコーは

1855年のパリ万国博を見て回り、あまりの大きさに迷子にさえなった経験から、女性のエレガントな買い物の巨大な殿堂を築き上げたいという壮大な夢を持ったという。10年後の1863年には、年間売上高700万フランに達していた。この年彼は、アメリカで巨富を築いた同郷のアンリ・マイヤールの資金を得て、ボンマルシェの共同経営者の権利を買取った。単独の経営者となったブシコー夫妻は、巨大店舗をつくる夢の実現のために可能な限り周辺の土地を買取って継ぎ足し、拡張に次ぐ拡張によって店舗面積を拡大した。しかし、継ぎはぎでは思うような商の殿堂を築くことができず、まとまった土地を探していたところ、折よく1869年、オスマンのパリ改造のための区画整理によって隣接地にあった施療院が取り壊されることになり、ブシコーはオスマンに直談判してこれを購入することができた。1869年に工事を始め、普仏戦争（1870年）のために工事が遅れたが、1872年に第一期分を完了して開店した。最終的に、全部まとめて32,800 m²の土地に巨大デパートを建設し、1877年にブシコーが亡くなったとき、ボンマルシェは、パリ第一はもちろん、世界のデパートになっていた。

1855年パリ万博の家計展示を見て感動したブルードンが、これを常設展とするよう提唱したといわれるが、その提案は20年も経たないうちに、見るだけでなく、その場で品物が買えるデパートという形で実現したのであった。



なお、ブシコーのボンマルシェに続いて、1855年のパリ万博のために建てられたグランドホテル・デュ・ルーブルの一階にルーブル百貨店が開業したことはすでに述べた。次いで1865年にプランタンとサマリテーヌが開店した。ガルリー・ラファイエットは1897年の開業である。

かくして、豪華ホテルとカフェとデパートは、いずれも19世紀後半の都市を彩る装置として大都市に生まれ、豊かで新しい生活のシンボルとなり、旅行者を魅惑するパリを形成していったのである。

都市内交通の改善：移動手段としての乗合馬車

19世紀初頭のパリ市内の道路交通はひどかった。歩道は幅の広い道路についているだけで、普通の道路は中央をくぼませて汚水が底を流れる仕組みになっていたが、雨が降ると排水能力が乏しいためすぐに溢れるし、階上から汚物を捨てる者もいた。徒歩で遠出すれば、走り回る馬車にはねられる危険や、服が汚れるのを覚悟しなければならなかった。要するに、買い物や遊びに遠出する者は、馬車を使える階層に限られていたのである。

近所の行きつけの店を離れて賑やかな通りへ買い物に出かけるには、市内交通が容易であることが条件である。それを可能にしたのが庶民の都市内移動手段となる乗合馬車の登場であった。

乗合馬車の誕生 乗合馬車は、哲学者のブレイズ・パスカルの考案により、この時から150年ほど前の1662年から77年まで、パリで15路線を設定して走らせたのが最初とされている。この馬車は〈5銭馬車〉と呼ばれ人々を安く運んだが、それでも乗客は増えず、経営が行き詰って15年しか続かなかった。時代はまだ都市内に乗合馬車を走らせるのは時期尚早だったようで、以後1820年代に至る一世紀半、都市に乗合馬車は存在しなかった。

では近代の都市内の乗合馬車はその後どのように誕生したのか。記録によると最初に決められたルートで人を運んだのは、1824年にマンチェスターの徴税人が、市場から自身の徴税所まで乗合馬車を定期運行したのが最初とされている。8～9人乗りで日に3往復し、乗車料金はかなり高かったという。要するに、金持ち階級ないし商人のための交通手段として提供したということである。

次いで1826年（1825年とする文献もある）に、フランスのナントで、スタニスラス・ボードリーによって運行が始まった。ボードリーはナントで粉ひき所を経営していたが、風車の代わりに蒸気機関を使い、出てくる熱湯を利用して隣に公衆浴場を開設した。そこで市の中心部から自分の粉ひき場まで、時刻を決めて定時に乗合馬車を無料で運行し、客に乗って来てもらおうとした。ボードリーの浴場は商業地区にあったため、乗客は浴場に行くためにではなく、便利な移動手段として利用したのだった。そこでボードリーは、乗合による公共交通の需要が多いのだと考えた。1826年8月10日に会社を設立して市役所に乗合馬車の定期路線運行許可をもらい、パンフレットを作成して出資者を募り、9月30日から運行を開始した。ボードリーが社長で最大の株主であった。16人乗りの馬車2台を使用して2路線で運行し、会社は成功した。

なぜオムニバスと呼ばれたか Omnibusはラテン語で〈みんなのため〉の意である。この言葉が乗合馬車の呼び名になったいきさつは次のようなものであった。通常名前はその創造者が名づけるものだが、オムニバスは消費者が名づけた珍しい例である。ボードリーのバス路線の起点に帽子屋があり、その帽子屋の看板にOmnes Omnibusと書かれていた。言葉の意味は〈tous pour tous〉（すべてのためのすべて）である。帽子屋の店員たちは単にオムニバスに行くというような言い方をしていたらしい。ボードリーが会社を設立し、こ

ここに起点となる停留所を置くことにした際、彼がこの言葉を乗合馬車の呼び名として公式に採用したことから始まったのだという。

パリへ進出 1827年、ボードリーはパリでの乗合馬車の運行申請をしたが、当時のセーヌ県知事は許可を与えなかった。しかし、知事の交代によって1828年に許可が得られ、パリの出資者とともに乗合馬車会社を設立した。パリでも2路線でスタートしたが、間もなく急成長し、8か月後には従業員200名、所有車両89台、800頭の馬を擁し、10余の路線を運行していた。

だがいつまでもうまくは行かなかった。次から次に乗合馬車会社が設立され、1829年末には10社合計264台の馬車が行き交ったという。1830年になると、過当競争のあおりで飼葉の値段が急騰し、ボードリーの会社は破産の危機に立たされる。その結果、ボードリーは会社の厩舎前でピストルで頭部を撃ち抜いて自殺してしまった。彼は死んだが、会社の方は存続し、パリ市内の公共交通の重要手段を提供し続けたのであった。



乗合馬車、定員は15名ほど

1830年代に入ると道路に歩道が設けられ、市内交通の便が良くなっていく。こうして不特定多数の来客が見込めるようになったことから、馬車が通り、歩道のある広い道路沿いにマガザン・ド・ヌヴォーテは開業していったのである。乗合馬車の値段は25サンチームで、タクシーに相当する辻馬車の代金（鹿島は今日のお金で1000円ほどと推計している）の6分の1と安かったから、近所の布地屋でしか買わなかった女性たちが、乗合馬車で服地を買いに出かけて行くことになる。1855年には、乗り換えの不便さと別料金の支払いで旅行者が混乱することを心配したオスマン県知事の要請で、パリ市乗合馬車総合会社（CGO：今日のパリ市交通公社 RATP の先祖）一社に統合され、ますます便利になった。ボードリーが設立した会社はその中心的な存在であった。

ちなみに、軌道上を馬が引く乗合馬車〈トラムウェ〉は、1873年にパリ市内と郊外に全長105kmが設置されている。地下鉄の登場はロンドンが最初で、1863年に蒸気鉄道による地下鉄が開通し、1865年（慶応元年）幕府の遣欧使節団一行もこの地下鉄に試乗している。パリではだいぶ遅れて1900年に導入された。

万国博覧会の及ぼした影響と巨大博物館

万国博覧会は国威をかけた大型のイベントであるが、ほかに、規模は小さくても、売ることを目的としない様々な規模と分野の展示会が頻繁に開催されるようになったことも万国博の影響のひとつとして挙げられる。また、見せる効果を最大限に発揮した万国博覧会の展示は、それまでの常設展示館の在り方にも大きく影響を及ぼすことになった。博覧会や展示会に対する大衆の関心と反応は、それまで《見せること》にそれほど熱心でなかった各種の博物館や美術館を大きく刺激したのであった。

影響の第一は、博覧会をきっかけに国家規模の博物館が沢山誕生したこと、第二は、展示方法が著しく改善されたことである。直接的には、1851年ロンドン万国博の利益を用いてヴィクトリア・アルバート博物館、科学博物館、自然史博物館などが建設されているし、万博で披露された巡回式のろ過装置は、内陸部での魚の飼育を可能にし、早速1853年にロンドン動物園の水族館に導入されている。実際に蒸気機関で機械類を動かす動力展示や、のちには自転車、自動車、飛行機などの迫力ある展示が各地の科学博物館に導入されていた。

多くの一般大衆が万国博覧会を参観のために訪れた背景には、交通の発展とこれに連動する観光産業の発展があった。かくして19世紀後半以降に開催される国内外の博覧会や展示会にも、常設の博物・美術館にも、日常的に大勢の参観客が訪れるようになっていく。とりもなおさず、これらが新時代の重要な観光資源になったということである。

ここでは、世界有数のロンドンの大英博物館とパリのルーブル博物館の創設について簡単に触れておきたい。

大英博物館 近代的博物館の嚆矢となったのは大英博物館である。貴族階級の医師として財をなし、アン女王、ジョージ一世、ジョージ二世に侍医として仕えたハンス・スローン Hans Sloan (1660～1753) は博物収集家としても知られ、1767年から68年にかけてジャマイカに旅行した際には、800種もの新種の植物を発見してカタログを残した。加えて、他者の様々なコレクションを購入し、動植物、鉱物などの標本8万点、活版版、写本版などの蔵書等、学術的に貴重で膨大なコレクションを築き上げた。彼は死に当たって、収集品の一括管理と公開を遺言した。コレクションが余りにも膨大で、王室による一括買い上げが財政的に難しかったため、国家として管理することになった。議会は他の収蔵品をも合わせて収納・公開すべく、1753年大英博物館法を制定した。博物館の場所は現在地にあった旧モンテギュー邸を改修して充てることとし、1759年に一般公開した。その後、ジョージ四世が父王の収集した膨大な量の書物を博物館に寄贈した際、建物が古く手狭になったため改築された。その後も改築を重ね、19世紀の半ばにほぼ今日の形になった。大英帝国の繁栄によって世界中から珍しいもの貴重なものを集め続け、最大の観光ポイントのひとつとなっている。

ルーブル美術館 パリのルーブル博物館は1793年に設立された。設立といっても、ルーブル宮は中世以来の王宮であり、ルイ14世が1682年に居城をヴェルサイユ宮殿に移して以来、代々の国王の美術品等のコレクションの収納場所になっていた。1715年にルイ14世が亡くなった時、2,500点の絵画がルーブル宮とヴェルサイユ宮の回廊を飾っていたという。フランス革命時、王家や教会所有の美術品などが散逸するのを防ぐべくルーブル宮に集められ、集まった収蔵品が1793年から公開されて美術館としてスタートしたということである。さらに、ナポレオン一世の時代に戦勝国として美術品類を収奪したり、ギリシャ・ローマの考古学的遺産や美術品を多数持ち帰って収蔵品は膨大な量になった。王政復古後、また第二共和政時代にも収蔵品は増加を続け、19世紀の半ばにほぼ現在の形の美術館となった。これもパリ最大の観光ポイントの一つである。

4. 観光行動の広がり

交通手段の整備と改善が進み、人々の可処分所得が増えれば、観光行動が広がるのは必然である。すでに採り上げてきた項目以外に、関連する事項を本項で整理しておく。

1) 自転車の登場とサイクリング

馬車のような個人の乗り物を持つことは貴族の特権であったが、ヴィクトリア朝後期の自転車の登場によって、中流階級も手軽に個人の輸送手段を利用できるようになり、人々の行動半径が広がる。自転車は大量生産された最初の耐久消費財であり、イギリス工業の発展に重要な役割を果たしただけでなく、個人の道路上の自由が確保されたことによって、自転車文化とも呼ぶべき風潮が誕生する。スポーツと結びついた若者の文化、平等を標榜する社会主義的文化、女性の行動の自由を支持する文化、などである。もちろん観光行動にも大いに利用された。

自転車の歴史

自転車の歴史を語る本は、どれもレオナルド・ダ・ヴィンチとその弟子が描いたという今日の自転車によく似たデッサンから話を始めている。これを見ると、少なくともダ・ヴィンチが自転車というものの原理を考案したらしいことは読み取れるが、自転車なる物体の誕生は、1790年にフランス人ド・シヴラックが木馬の脚に車輪を取り付けて足で蹴りながら走った《セレリフェール》という2輪の乗り物が元祖とされている。次にドイツ人ドライス Karl von Dreis がやはり木製の足蹴り式自転車を《発明》し、1818年に特許を取って、ドライジーネという名が与えられた。次いで1839年にスコットランド人カーパトリック・マクミランが後輪駆動のペダルをつけ、初めて足が地面を離れたとされている。以上の3種は、記録と絵はあるが、現物も図面も残っていない。

ミショーからターナーへ ここまでが前史で、事実として辿れる歴史では、フランス人ピエール・ミショー(1813~83)が、1861年、前輪にクランクを直接固定する自転車を開発

し、これが初の量産自転車となった。1867年のパリ万国博覧会に出展され、交通手段として世界に認められた。普及の勢いはとどまるところを知らず、ルイ・ナポレオン王子やアルバ公爵といった貴族階級にまでファンが生まれた。ミショーの「パリ自転車会社」は300人の従業員を雇い、年間1000台以上を売ったといわれる。

ミショーは馬車の製造会社を営んでいたが、1861年、19歳の息子エルネストがドライジーネに乗っていて、脚が疲れるから前輪に足休めをとりつけたいと言った。父はそれならいっそ車輪を回すペダルを取り付ける方がよかろうとなって、近代的自転車（ヴェロシペードと呼んだ）の誕生となった。次いでブレーキをつけ、車輪も大きくするなどの改良を行って量産できる体制ができたのであった。しかし不運なことに、1870年の普仏戦争でパリが独軍に攻め込まれた時、ミショーの自転車会社は再起不能の打撃を受けてしまった。自転車の製造はイギリスとアメリカに追い越され、エルネストは1882年、父ピエールは翌1883年に亡くなった。

ミショーの自転車が1867年のパリ万博に出展されていた頃、英国コヴェントリーのミシン工業会社のパリ支店にいたローリー・ターナーは、自転車教習所で運転を習って熟練の乗り手になっていた。彼は翌1868年秋、ミショーの自転車を購入してロンドンに持ち帰った。ロンドンっ子たちの熱い視線を浴びながらロンドン・ブリッジを渡り、ユーストン駅へ乗り付けて列車に乗せ、コヴェントリーでは駅からミシン工場まで衆人環視の中をさっそうと走り抜けて人々を驚嘆させたという。彼は工場長だった叔父を説得して自転車の製造を始めさせ、1869年からフル回転でフランス向けの輸出と国内向けの生産に励んだ。イギリスでは、このミショー型ヴェロシペードはボーンシェイカー（骨ゆすり）と呼ばれた。これを改良して自転車工業の父と呼ばれるようになったのが、コヴェントリー機械工会社を設立して自転車の改良に取り組んだジェームズ・スターリー（1831～81）である。木製のスポークをワイヤー・スポークに換え、鉄の輪を固いゴムタイヤに換え、軽量で乗りやすい自転車を開発した。同社は、自転車はスポーツ向きであると考えて自転車学校を併設し、練習コース作って指導した。スターリーは1870年にスピードを出すために前輪を大きく、後輪を小さくした新型の自転車〈エリエール〉を開発し、以後このタイプの自転車（アメリカではオーディナリーと呼ばれた）が1880年代初頭まで主流になった。早く走れたが、不安定で乗りにくかったため、安全で快適な乗り心地を求めて多くの会社がしのぎを削った。

安全自転車「セイフティ」 次の飛躍的改革は、ジェームズ・スターリーの甥ジョン・ケンプ・スターリーが1885年に開発した「ローバー」である。安全自転車（セイフティ）とも呼ばれ、前後輪同一サイズ、後輪チェーン駆動、ダイヤモンド型フレームを採り入れて改良し、今日の自転車の原型となった。1885年以降、オーディナリーに代わってセイフティが道路の王者の地位に着いた。

次なる重大な改革は空気タイヤの装填である。ベルファストのジョン・ダンロップ（1840～1921）の考案によるもので、1888年に特許を取ったが、空気タイヤをリムに取り付ける方法など、事業化するにはいくつかの課題を残していた。これを解決して1890年に

売り出したところ爆発的な売れ行きで、それまでの自転車を駆逐してしまった。ロンドンで毎年開かれる自転車ショーへの出品を見ると、1890年では空気タイヤ20種対固定タイヤ1543種であったのに、1895年には空気タイヤ1588種対固定3種になっていた。

安全自転車が大量生産されて安くなったといっても、まだ19世紀末で5~15ポンドはした。当時の工場労働者の週給が1ポンド強(21~23シリング)であったから、収入の2ヶ月分以上に相当し、労働者階級にはまだ高嶺の花ではあった。さらに時が進み、中古市場が形成される20世紀初期には、1台2~5ポンドで手に入るようになり、日常的な乗り物になっていく。

サイクリング・ブーム 初期のボーンシェーカーやオーディナリは、スピードを出すために前輪を大きくしてあったため、走行は乗り手にも歩行者にも危険で、自転車乗りはアクティブな青年向けのスポーツにとどまっていた。その後、乗り心地や安全性が改善され、大量生産によって価格が下がると、中流階級を中心にサイクリングという新しいスポーツが普及する。それまでの社会は乗馬階級と歩行階級に二分されていたが、新たに自転車という第三の階級を誕生させ、貴族や富裕階級が独占してきた余暇活動が広く中流階級に広がるきっかけともなった。

1878年は自転車にとって転機の年であった。各地にサイクリストたちのクラブができていたが、この年全国組織としてバイシクリング・ツーリング・クラブ **Bicycling Touring Club** (5年後に **Cyclists' Touring Club**、略称 **CTC** と改称) が結成された。同年ロンドンで初の自転車ショー「スタンレー・バイシクル・ショー」が開催され、以後毎年開催されて今日のモーターショーに似た人気を博するようになる。さらに全国サイクリスト連合 **National Cyclists' Union** が創立され、第1回全国選手権大会が開催されている。オックスフォード、ケンブリッジ両大学でサイクリングがスポーツとして公認されたのもこの年であった。

様々な催しが各地のクラブ主催で行われたが、1874年にはすでにロンドンに7クラブ、地方には計22クラブあり、全国組織が結成された1878年にはロンドンに64、地方に125のクラブが存在していた。1クラブの平均会員数は30~40人だったが、中には100人を超えるクラブもあった。各クラブはウィークエンドの小旅行や賞金付レースを企画し、時には貧しい人たちのために自転車を貸し出したりもした。全国組織のひとつ、前述の **CTC** は1880年代半ばに会員数2万を超える世界最大のスポーツ団体となっていた。とくに空気タイヤ付安全自転車が普及してからは、〈危険・怖い〉は自転車に乗らない言い訳にならなくなり、1895年以降、自転車は女性を含め、万人の乗り物になっていく。1895~97年の自転車ブーム時には、年間生産台数が75万台、サイクリストの数は150万人を超えていたといわれる。サイクリストは貴族や富裕階層の中にも広がって一大政治勢力に高まり、イギリスの鉄道会社と交渉して、自転車の鉄道輸送と保管方法の改善、輸送賃引き下げなどを申し入れ、その実現を迫るだけの実力を備えるまでになっていた。

ヴィクトリア末期のこの時代、サイクリングは、登山、ゴルフ、テニスと同様に中流階級のエリートのスポートないしレジャーとして、とくに若い男女に人気があった。中でもテニスとサイクリングの人気が格別に高かったという。

サイクリングと女性解放 1880年代に女性のために3輪の自転車が作られて、女性も自転車に乗れるようになった。1890年代に入ると軽くて乗りやすい婦人用の二輪の安全自転車が登場し、ウィークエンドに男性に交じって女性も市内の公園や田園でサイクリングを楽しむようになる。かくして、女性のサイクリング熱は全国に爆発的に広がっていった。1890年に初の女性のサイクリング・クラブ **Coventry Lady Cyclists Club** が生まれたが、同年すぐに **Lady Cyclists Association** へと発展した。1883年の女性用自転車は50台に1台に過ぎなかったが、1896年には3台に1台が女性用というほど急速に発展した。

ここに至るまでには、それまでの女性に対する偏見と束縛をめぐる戦いがあった。サイクリングは中流階級の、とくに若い女性の生き方に大きな変化をもたらしたからである。戸外での娯楽やスポーツの機会に恵まれなかった女性にとって、自転車は体位の向上と健康増進、それに心身への良き影響をもたらした。富裕家庭の若い女性は、シャペロンと称する監視役のもとでしか外出できず、行動を大きく制約されていたが、サイクリングは彼女たちに思う存分自由の空気を吸うことを許したのであった。このことは女性の解放という社会的傾向と無関係ではなかった。荒井政治「レジャーの社会経済史」によれば、1890年代の初めに男性同様に自転車を乗り回す若い女性が出現して多くの人々にショックを与え、良識派の女性たちは慎みを忘れた自由奔放な彼女らの行動に顔をしかめたという。

…自転車に乗った女性は、社会から、そして一般公衆から、ある種の宗教的憎悪のまなざしで見られていました。自転車にまたがった女性は、やけになって女らしさをかなぐり捨てたと明らかに言われたものです。都会ではじっと見つめられ、嫌味を言われました。身持ちの悪い、女らしくない、目立ちたがりやの女でないかぎり、男のような遊びをするものはいないと考えられていたのです。そんなわけで、自転車に乗る女はみな、そうした世間の白眼視に耐えていかねばなりませんでした。(女性サイクリスト協会長だったデイヴィッド女史の回想)

かくして、社会的地位の向上、政治的社会的権利の拡張を求めて闘ってきたフェミニスト、因習的・保守的な女性観を打破するために闘ってきた「新しい女性たち」**New Woman** たちの多くは、自らサイクリストであり、あるいはその支持者であった。

女性にとってのもう一つの悩みは、サイクリング・ウェアであった。長いスカートでは脚の動きが妨げられ、裾がペダルやスポークにからんで危険であった。この問題を解決したのは、フランスの女性サイクリストの間で流行していた一種の婦人用ニッカーボッカーで、イギリスで「ラショナル・ドレス」(合理服)と呼ばれた服である。アメリカのアメリカ・ブルーマー(1818~94)が考案した脚の別れたズボン型のファッションをスポーツ向き

に改善したもので、1881年にはロンドンに「ラショナル・ドレス・ソサエティ」が設立されている。設立趣旨には次のように書かれている。

ラショナル・ドレス・ソサエティは、体型を変え、身体の動きを制約し、どのような形であれ健康を害する類のファッションに反対する。また、健康のための運動をほとんど不可能にする身体を締め付けるコルセット、ハイヒールの靴、重すぎるスカートに排撃する。ひもで縛る袖なしマント、その他腕の動きを制限するする衣類に反対し、クリノリン、クリノリネットなどは、不自然で体型を変容させるものとして反対する。…協会はすべての人々に、健康的で快適、美的な服装をすることを要請する…。

女性が自転車に乗ること自体が白眼視されていた保守的なイギリスでは、二股のズボン風スカートをはくこと自体がかなり勇気のいることであった。それでも、スポーティなラショナル・ドレスに身を固めて颯爽と走る女性サイクリスト姿は時代の先端を行き、結果として、1893年に『サイクリング』誌上で一カ月続く有名な女性のラショナル・ドレス大論争が起こった。事の発端は、9月に16歳のテシー・レイノルズ嬢がラショナル・ドレスを着用し、男性に混じってブライトン～ロンドン往復120マイル（約192km）を8時間半で走破したことを『サイクリング』紙の編集長が非難したことであった。これをめぐって、ラショナル・ドレス推進派である女性解放運動家たちが少女を殉教者扱いにしてその快挙を称えたのに対し、反対派は、サイクリングの普及と女性の健康と幸福の増進に努めている真のスポーツ愛好家、まじめな女性サイクリストにとって少女の行動は迷惑である、と批判した。しかし、すでに女性がラショナル・ドレスを着て自転車に乗ることに目くじら立てる時代は過ぎており、「レイノルズ嬢は運動の先駆者であって、ペチコートに反対する嵐が近づいたことを告げるウミツバメに過ぎない」というさるジャーナリストの声が一般の雰囲気代表していた。この後、女性サイクリストやラショナル・ドレスに対する世論は急激に変わり、デイヴィッドソン女史によれば、1895年には、この国のどんな片田舎でもはや自転車に乗る女性の姿は人目を引かなくなっていたし、ラショナル・ドレスの着用者が全国を旅行しても、無礼な忠告を受けることも、腹立たしい思いをすることもなくなっていたという。こうした展開はヨーロッパ大陸諸国でもアメリカでも大なり小なり起こっており、自転車が女性の解放に一役買ったことは明らかである。

ついでながら、トマス・クック・アンド・サン社は、サイクリング・ブームに応じて、1896年に海峡を越えたノルマンディー行き初の添乗員付き大陸自転車ツアーを催行したが、参加者12人の中に複数の女性参加者がいた。このサイクリング・ツアーは大成功で、翌1897年にはブローニュ・シュル・メールへのツアーも試み、こちらも大当たりしたことから、続々と模倣者が現れたという。サイクリストは新しい自由交通手段を駆使して自由に空間を駆け回る「時の人」になったのであった。

2) 近代スポーツの誕生と発展

近代ツーリズムが鉄道の出現によって始まり、馬車時代の旅行とは区別されるように、近代スポーツも 19 世紀の半ばにスタートしたと考えることができる。肉体的な訓練や遊びで今日のスポーツに類似した行動は古くから行われてきたが、近代以前のスポーツは遊びと分化しておらず、ルールも一定せず、それらの行動の中のスポーツ競技的な面を強調するにしても、スポーツというより、戦いのための訓練の域を出なかった。

スポーツもイギリスで誕生 ツーリズムと同じく、スポーツもイギリスで誕生した。近代スポーツの内、ウィンター・スポーツ以外のスポーツは、ほぼすべてイギリスで誕生している。競馬、アーチェリー、クリケット、サッカー、ラグビー、ホッケー、クローケー、テニス、陸上競技、水泳、漕艇、ボクシング、サイクリング、登山、バドミントン、卓球などである。ほかに広く世界で行われるようになったスポーツといえば、ヨーロッパ大陸北部（スウェーデン、ドイツ）生まれの体操、アメリカで誕生した野球、それに日本の柔道くらいである。

近代スポーツが成立するためには、単なる遊びから分化し、力と技を競うためのルール・場所・用具が決められ、支配階層だけの遊び事から中産階級にまで広がるのが前提で、その条件を満たして初めてスポーツ競技として認められる。さらにそこから発展するためには、プレーヤーのほかに観客が登場し、観客の前で試合が行われることによって人々の関心を集め、ファンを生み出していくという過程を辿る。

特定のスポーツ競技の起源を考える場合、どこかで誰かが行うようになり、同様の活動が他の地域に広まっていくとして、それらのルールや遊び方がある程度まで一定しないうちは、スポーツ競技として成立したとは言えないであろう。例えば、ボール（球・毬など）を蹴ったり、打ったり、転がしたりする遊びは世界中どこでも古くから行われており、ルールも遊び方もまちまちであるから、それらの痕跡を追いかけるのはあまり意味がない。

河北稔編『「非労働時間」の生活史』は、スポーツが社会的に成立したかどうかは、競技と競技者の全国的統括団体が成立した時点を目安とするとしている。これによると、概ね 18 世紀半ばの産業革命の初期から 19 世紀の後半にかけて多くのスポーツが生まれている。もちろん個々の競技の中には、それ以前に数世紀にわたって様々なバリエーションによって遊ばれてきたものがあることは言うまでもない。統括団体が誕生した最初期のスポーツとしては、1750 年に全英の競馬レースを統括するジョッキークラブが結成された競馬、1754 年に統括団体としてセント・アンドリュース・ゴルフクラブ (St. Andrews Golf Club) ができたゴルフ、1781 年に弓術愛好協会が設立されたアーチェリーなどがある。

しかし、時代はまだ工業化以前の農業中心の社会であって、余暇を享受しえたのは貴族およびジェントルマン階級（ジェントリー：貴族ではない地主富裕階層）だけであった。言い換えれば、スポーツと呼ばれるほど高度の遊びができるのはまだエリートだけで、有閑階級の遊びにとどまっていたから、近代スポーツ誕生の前史と見るのが妥当であろう。

なぜとくに英国でのみスポーツが発達したのか。産業革命の進行が速く、社会が他国に先駆けてスポーツを楽しむレベルに達したという背景があったし、鉄道の幹線網が出来上

がるのも早く、旅行の容易性がスポーツ競技会などの開催を促したという事情もあった。しかし、それだけでは他のヨーロッパ諸国にスポーツが誕生しなかった理由にはならない。ミクロに見ればスポーツという遊びや競技は、人々の生活に密着した独自の社会的性格をもっており、産業革命発展期の英国社会の在り様と密接に関連している。簡単にいえば、イギリスの支配階級である貴族とジェントルマン階級が、他のヨーロッパ諸国と異なっていたという事実に帰せられるようである。既述のとおり、イングランドの貴族は百年戦争とバラ戦争によって中世以来の旧貴族がほとんど絶滅し、その後の王朝によって新たに貴族に任ぜられた者たちであった。旧来の貴族のような特権をもたず、税金も払われ、上層のブルジョアとさして異なることがなかった。商業にも従事し、ブルジョワと協力して事業を営み、好んで領地に居住してその経営に努力していた。

産業革命以前は、余暇を独占していた支配階層だけが自ら楽しむ活動としてスポーツを行っていた。中にはクリケットのような民衆起源のものもあるが、ルールの決定や競技の場所の確保、競技会の主催や運営はジェントルマン階級に依存したから、ほぼすべてのスポーツがジェントルマン階級をパトロン（後援者）として発展してきた。

鉄道の普及する 1850 年代以降になると、多くのスポーツが誕生し発展するようになる。例えばサッカーは 1863 年にフットボール協会（FA）を設立し、ラグビーは 1881 年にラグビー・フットボール・ユニオン（RFU）を設立している。同じく 1881 年にローンテニス協会、1887 年にはホッケー協会が設立された。かくして、スポーツの競技会は地域レベルから全国レベルへ、そして国際レベルへと発展する。スポーツもまた、長距離の移動手段の発展と軌を一にしており、鉄道の発展、旅行の発展と連動して発展してきたのであった。

近代オリンピックの誕生

近代オリンピック大会は、19 世紀末に、古代ギリシャのオリンピアで行われていたスポーツの祭典を復活させる試みから誕生した。まだスポーツがあまり普及していなかった時代にアテネで第 1 回大会が開催され、2 回以降は万国博覧会の添え物として開催されるなど、順調な滑り出しとは言えなかった。

意外なことに、近代オリンピックは、スポーツ大国イギリスによってではなく、当時スポーツ後進国だったフランスのピエール・ド・クーベルタンの孤軍奮闘の結果奇跡的に誕生した。国家としてのフランスにオリンピックへの関心は全くなく、むしろクーベルタンの足を引っ張ったというほうが当たっている。歴史事象には、特定の個人の功績とされるものは数多いが、後世から見れば、その人が取り組まなくても、いずれ誰かの手によって誕生したであろうと考えられるものがほとんどである。だが、近代オリンピック大会は、その誕生と発展の経緯からみて、クーベルタンなくしては生まれ得なかったかもしれないと思わせるほど彼の功績は大きかった。

ピエール・ド・クーベルタン ピエール・ド・クーベルタン男爵（1863～1937）は、パリ近郊のシャトーで、イタリアに起源をもつ貴族の旧家に生まれた。ローマにあった祖先の屋敷から、ルネサンス期の1506年、古代ギリシャの有名な彫刻「ラオコーン群像」が発見されたことはよく知られている。ラオコーンはトロイアの神官で、トロイア戦争の末期、女神アテーナーへの贈り物として城内に運び込まれた木馬を、ギリシャの策略と見破って警戒を呼びかけ、これを暴くために槍を投げつけたという伝説の人物である。怒った女神アテーナーは2匹の蛇を使わし、2人の息子とともにラオコーンを殺害したとされている。ジョン・マカールン「オリンピックと近代：評伝クーベルタン」の序章『悲劇の予感』によると、クーベルタンは少年のころ、祖先にゆかりあるラオコーンの物語を、「真実がなかなか理解できない人々に対し、真実をしつこく告げる者が迎える運命」と理解していたという。p21。

クーベルタンは学生の頃、自身の将来について漠然と教育者たることを考えていたものの、行くべき道を見いだせずにはいた。1883年20歳の時、イギリスの強さは教育制度にあると考えてイギリスに渡り、パブリック・スクールや大学の教育制度を視察し研究した。その後も彼は何度か渡英しているが、1886年夏に訪英した時、ラグビー校校長だったトマス・アーノルド（1795～1842）の墓前で一つの天啓を得たという。それはアーノルドが主導した〈スポーツによる青少年教育〉という思想であった。1887年にフランスに戻った彼は、フランスの教育制度の改革に取り組む一方、スポーツを貴族階級だけのものから、ブルジョアはもちろん、最終的には労働者階級にまで広めたいという活動目標を得ていた。それだけでなく、やがて古代ギリシャの民族の祭典であった古代オリンピック競技会を、世界規模で復活させようという壮大な夢に向かって走り出したのであった。

フランス革命100周年を記念する1889年のパリ万国博覧会は、振り返ってみれば近代オリンピック開催への小さな第一歩であった。当時、ドイツの考古学者エルンスト・クルティウス（1814～96）が指揮するドイツ隊がオリンピアを発掘調査中であり、その発見にもとづく精巧な模型が博覧会場に展示されていた。スポーツの力を信じていたクーベルタンが、古代オリンピアの祭典を復活させようと思い立ったのはある意味で自然ではあった。弱冠26歳のクーベルタンは、万国博に合わせて開催される多くの国際会議の中に「スポーツに関する国際会議」を含めるよう働きかけて成功した。その会議の一環としてリセ（高等学校）の生徒たちによるスポーツのデモンストレーションが行われ、これがクーベルタンにとって、国際的イベントに組み込まれたスポーツの初体験であった。

万国博終了後、クーベルタンは積極果敢に各方面に古代オリンピック復活の働きかけを開始するのだが、現実の問題として、すぐに実現しようとするのは時期尚早であった。裕福な貴族の御曹司ではあっても、20台半ばの徒手空拳のクーベルタンに賛同する人はほとんどいなかった。1880年代後半といえば、英国でさえようやくスポーツの大切さが認識されはじめたばかりだったし、大陸諸国にスポーツはまだほとんど広がっていなかった。普仏戦争に負けたフランスは、軍隊の強化に励んでいてスポーツへの関心は低かったし、外

ではヨーロッパ諸国が植民地争奪戦を繰り広げ、国際協調やフェアプレイの精神とは相いれない世相であった。にもかかわらずクーベルタンは、1894年に「パリ国際スポーツ会議」の開催にこぎつけ、強引に1896年に第1回近代オリンピック大会をアテネで開催することを決議させてしまった。

第1回アテネ・オリンピック大会 1894年の会議で、クーベルタンは、当初1900年にパリで第1回の近代オリンピック大会を開催する決議を強行した。ところが、どうせやるなら6年間も待つのは長すぎるという声上がり、クーベルタンは勝手にギリシャ代表と会談し、急きょ2年後の1896年にアテネで開催すると決めてしまった。気持ちの高揚が覚めてみると、「ギリシャは経済危機のさなかにあり、文明国と呼ぶにふさわしい生活の基本すら充分達成されておらず、スポーツ競技の概念すらない国に、そんな大それた大会を主催する財源も力もない。是非パリでやってください」という趣旨のトリクーピス・ギリシャ首相直々の辞退表明が寄せられていた。肝心のフランスは、選手を送る経費負担すら拒否し、英国は大英帝国競技会の開催が先だと冷たかった。それに、アテネはあまりにも遠く、ヨーロッパからの鉄道自体がまだ通じていなかった。

それでもギリシャ側は、紆余曲折の末、ゲオルギオス国王と皇太子の決断で開催に踏み切り、ギリシャの官民上げての準備により、1896年4月6日～15日、第1回アテネ大会は開催された。古代競技場跡に5万人収容可能の大理石の競技場が建設され、ギリシャ国民は担った栄誉に興奮したが、参加する側の意欲は低かった。参加国は14カ国、集まった競技者数はエントリーの仕方があいまいだったのでいろいろな数字があるが、武田薫著「オリンピック全大会」によれば合計241人で、そのうち200人がギリシャ人であったという。外国人選手はわずか40数人に過ぎず、内訳はアメリカ人が学生ばかり10名、近隣国のハンガリーが8名、英国からは物遊山気分の学生6名が個人の資格で参加した。フランスはといえば、長距離走1名、自転車2名、フェンシング4～5名のみであった。ほかにはデンマーク人4名、ドイツ人3名、スウェーデンとイタリアが各1名で、スイス、オーストリア、ブルガリアなどは開幕ぎりぎりに選手が現れる始末であった。それでも、この第1回大会はスポーツ専門の大会として開催され、大勢のギリシャ人観客の前で9競技42種目が行われた。華の陸上競技では、12種目中、マラソンを除く11種目でアメリカ人学生が金メダルを独占し、ギリシャ人をがっかりさせたが、最終日のマラソンでギリシャ人スピリドン・ルイスが優勝してギリシャ人を熱狂させた。

要するに、当時スポーツ競技はまだ遊びの域を出ず、国家がまともに取り組むには至っていなかった。続く第2回（1900年、パリ）は、予算不足ゆえに万国博覧会付属国際スポーツ競技大会とされ、長期の博覧会開催中にばらばらに競技が行われた。参加国と競技はアテネ大会の3倍の規模にはなったが、間延びした感は免れなかった。第3回（2004年、セントルイス）はさらにひどく、本来シカゴ開催と決まっていたものを、1903年に開催予定だったセントルイス万国博覧会が準備の都合で1年延期され、好都合とばかりにその付属大会にされてしまった。フランスは交通不便なセントルイスへの選手派遣を拒否し、ク

クーベルタン自身も参加しなかった。第4回（1908年、ロンドン）は、本来ローマで開催される予定だったものを、1906年のヴェスビオ火山の噴火による巨大被害を理由に（財政難の口実とも言われる）イタリアが開催権を返上し、ロンドンで同年開催が決まっていた英仏博覧会の併催行事とされたのであった。このときは、さすがにスポーツ先進国イギリスのこと、財政支援は受けても、純粋なスポーツの大会としてIOCによって運営された。

世界平和への祈願 古代オリンピック大会は、開催年に戦争が行なわれていれば戦争を中断し、選手や観客の安全を保障して開催された。クーベルタンは、この故事にならい、スポーツのフェアプレイ精神を通じ、多数の国の選手や観客が交流することによって世界平和に寄与することを祈願したのであった。クーベルタンは第1回のアテネ大会が終わった後、わずかな参加国と参加選手しかないオリンピックについて、「仮にオリンピックが将来繁栄に至るなら、一文明国家が皆協力してくれるならそうなるものと私は信じているが— 世界平和を確保する上で、間接的ながらも、強力な要因になるかもしれない」と述べている。クーベルタンはこうも言った。「戦争が起きるのは、二つの国が互いに相手を誤解するからである。異なった民族同士を隔てている諸々の偏見が根絶されるまでは、われわれは平和を達成できないであろう。平和を達成するために、あらゆる国の若人を定期的に一堂に集め、肉体の力と敏捷さを友好的に競わせることほど有効な手段が他にあるだろうか」。

第6回ロンドン・オリンピック大会では、400メートル決勝のゴール近くで、一人のイギリス人選手を複数のアメリカ人選手が囲む形で展開した。アメリカ人選手が勝利したとき、走塁妨害の反則で競技無効の判定が下され、再試合とされた。怒ったアメリカ選手団は再試合をボイコットし、険悪な雰囲気になってしまった。この時、アメリカ選手団を慰めた主教の言葉を一部引用したクーベルタンの言葉が後に有名な格言として残った。「オリンピック大会で重要なことは、勝つことではなく参加することである。同様に人生においても、重要なのは勝利ではなくよく健闘することである…」。

その後の展開は、クーベルタンのオリンピックの理念とその理念にかけた祈願があまりにも時代を先取りし過ぎていたことを実証した。事実、二次の世界大戦のために、3度オリンピック大会が中止となったし、クーベルタン自身がオリンピック組織委員会から疎外され、窮乏を見かねた友人たちの支援を受ける生活の中で、1937年、ジュネーヴ市内の公園で倒れ、孤独な死を遂げたのであった。

スポーツ競技を行なうオリンピック大会が華やかな国家の祭典として取り組まれるようになるのは、第二次世界大戦後のこととあってよいだろう。今日では、万国博覧会のほうが仮設パヴィリオンに勝る常設展示やテーマ別展示、さらに豪華なテーマパークなども登場して、ほとんど開催されなくなっているのに対し、今やオリンピック大会は世界平和への祈願をこめて拡大の一途にある。まさに今昔の感がある。

なお、スポーツの歴史と近代オリンピックの始まりについては、テーマ別論集「近代スポーツの誕生と発展」に詳述したので参照願いたい。

冬期オリンピック大会の始まり 冬期の複数のスポーツ競技を行なう初の国際大会は、1901年、スウェーデンで行われた。1903年、1905年にも開催され、以後1924年の第1回冬期オリンピックが始まるまで、4年に1度の頻度で開催された。IOC創立メンバーの一人で、クーベルタンの友人でもあったスウェーデンのヴィクトール・グスタフ・バルクは、冬季スポーツもオリンピック競技に加えるべきであると主張した。その結果、1908年のロンドン・オリンピック大会で、初めてフィギュア・スケート4種目が行われた。1912年のストックホルム大会では、オリンピック大会の枠内で一週間の冬期スポーツ大会を実施する提案がなされたが、この時は時期を二分する開催に難色が示され、競技会場も不十分であることを理由に見送られた。次の1916年のベルリン大会に向けて同じ問題が再検討され、スピードスケート、フィギュア・スケート、アイスホッケー、ノルディックスキートの4種目を併催することが決まったが、1916年大会自体が第一次世界大戦の勃発によって中止となった。

第一次大戦後初のアントワープ大会では、フィギュア・スケートとアイスホッケーのみが行われ、翌年のIOC総会で、次回1924年大会の開催国のフランスが、IOC主催のもとに一週間の冬期スポーツ競技会を夏期大会とは別に開催することが決められた。この時の一週間の冬期スポーツ競技会大会（実際は11日間）の開催地にはシャモニーが選ばれた。250人の選手が参加し、一万人以上の観客を動員し、競技会は成功と評価された。翌年のIOC総会は、この成功によって冬期スポーツのためのオリンピック大会を独立して開催することを決定し、シャモニーの冬期競技会を、遡って第1回冬期オリンピック大会とすることを決定した。第2回はスイスのサンモリッツで開催され、以後4年ごとに開催されてきた。

その後もずっと夏期大会と同年開催されてきたが、周知の通り、第17回のリリハンメル大会（1994年）から夏期大会の間の年に開催するよう改められている。

3) 近代的旅行ガイドブック・シリーズ

観光旅行を楽しむためには、大量の情報が必要である。見所を解説する情報、目的地へ赴く交通機関、訪問地内の移動・宿泊・飲食などに関する情報である。そうした情報のうち、文字によるものが^{トラベル・ガイドブック}旅行案内書であり、ギリシャ・ローマ時代から存在したことはその都度紹介してきた。

19世紀に観光旅行者が増加すると、特定の目的地の単発の旅行案内ではなく、一定のコンセプトによって広く世界の人気観光地を網羅する^{トラベル・ガイドブック}旅行案内書が叢書（シリーズ）として刊行されるようになる。その最初がイギリスのジョン・マレーJohn Murray（1808~92）による「トラベル・ハンドブック」（1836年に刊行開始）であり、次いでドイツのカール・ベデカーKarl Baedeker（1801~59）が始めた「ベデカー・ガイドブック」（1839年より刊行開始）である。どちらも19世紀の前半に刊行を始め、世界各国を網羅するガイドブック・シリーズとして旅行者必携の書物となった。

フランスではギード・ブルー（ブルーガイド）のほか、タイヤ会社のミシュランが地図と広範な旅行ガイドブック・シリーズを発刊した。アメリカでもガイドブックの発刊は盛んであった。このような叢書版ガイドブックの誕生と発展は、テーマ別論集「旅行ガイドブックの始まり」で詳細を紹介しているので、そちらを参照願いたい。

4) 観光促進組織の発生

旅行する側、つまり消費者側はまず旅行者によって代表され、交通機関や観光目的地側に対し、安価安全で快適な旅行を要請するようになってきた。各種のスポーツクラブはもちろん、文化や趣味のクラブなども活動の一環として旅行を採り上げるようになる。労働者の協会や組合、同業組合なども結成されて、旅行を含む会員のための余暇活動を実施する風潮となってきた。ツーリング・クラブや旅行クラブなど、直接旅行実施を目的とするクラブも登場する。このように消費者側（観光需要）が様々な形でよい旅行条件の獲得を目指して活動するようになると、受け入れ側（観光供給）でも、宿泊施設や域内交通業者、飲食業者、土産品店など、観光地内の幅広い関連業種が連携して対応する必要が生じてくる。地域の観光情報の提供、受け入れ態勢の改善、対外観光宣伝、その他やるべきことが沢山見えてくる。

そういう情勢を背景に受け入れ側に誕生したのが、直接観光客にサービスを提供する各分野の企業による同業組合であり、それらと横断的に協力するために、地方政府を調整役とする地方観光協会である。

地方観光協会の誕生 市町村ないし、より広域の地方単位で結成される観光振興のための組織を観光協会という。一人の観光客の滞在のための支出は、宿泊、飲食、慰楽、域内交通などなど、幅広く分散し、観光消費は個別の消費でありながら地域（面）に対する消費といえる。また、観光客の来訪動機は、海山などの自然環境や歴史遺跡、街並みなどからなる総合的「観光魅力」であり、これに安全や衛生、公的サービスの充実度など、諸々を含むイメージ全体が誘因力となる。それらの観光魅力は共有物であって、それ自体は基本的に無料である。旅行者は観光目的地への交通や目的地内での移動・宿泊・飲食その他の諸サービス、言い換えれば目的ではなく手段に対して対価を支払っているという構図である。それゆえ、観光客の来訪を促進したり、受け入れ態勢を改善したりといった事業は、一定の地域・空間を代表して行う作業であって、一種の公共事業である。ゆえに目的地全体を代表しうる公的機関の存在なしには行い得ない。19世紀の最後の四半世紀になり、観光地に観光客が増えて、落される金が目に見えるようになってくると、市町村やリゾート単位で非営利の公的機関「地方観光協会」が次々と誕生する。

それらしき組織の最初の事例は、1859年にフランス南西部のポーPauに誕生した観光業に携わる人々の組合であるとされる。次いで、1875年にフランスのヴォージュ地方の避暑地ジェラルドメールの有志・有力者たちによって設立された遊歩道整備を目的とする「ジェラルドメール遊歩道委員会」Comité de Promenades de Gérardmerが挙げられる。これ

らはまだ観光協会と言える組織ではないが、ともあれ、町の観光振興を目的にかかげた最初の非営利の組織体ではあった。

官民協力による公的機関で、広範な観光関連企業等を構成員とする最初の地方観光協会は、1885年にジュネーヴで設立された。その直後からジュネーヴにならってスイスの各地に地方観光協会が次々に誕生する。フランスでは、スイスを訪れて山岳地の観光振興の事例に影響を受けたグルノーブルのジュリアン＝フェヴリエなる人物が、1889年グルノーブル観光協会を設立したのが最初である。最大の観光客受入れ国を任するフランスのこと、スイスと同じように観光協会が雨後の筍のように林立する。これらの市町村（役場）を中核とする非営利団体（観光協会）は、観光情報の提供、受け入れ体制の改善、地域内関連業者の利害調整、対外観光宣伝などを目的として設立されたものである。ただし、小単位の観光協会が至る所に生まれても、事業を推進する人材も財力もノウハウも乏しく、重複と競合の心配があり、県別、州別の広域観光協会（連盟）に統合され、最終的には国単位の全国観光連盟というべき組織が結成される。

こうした経緯を経て全国観光連盟組織が結成されたのは、やはりスイスが一番早くて1893年である。続いてフランスでは1897年に、ドイツでは1902年に設立されている。そして次に来るのが、国レベルで国際観光客を誘致する中央組織の設立であった。

国の観光宣伝機関の設立 観光客による支出は、通貨が違う国で行われれば受け入れ国にとって〈外貨の獲得〉になる。ヨーロッパの国は地続きで、昔から国境を越える観光客が多かったが、20世紀に入る頃には国際観光客数も増えて、国際観光交流の経済的効果も注目され始める。とくにフランス、スイス、イタリアといった昔からの観光国ではその認識が早かった。

最初に国際観光客誘致を目的とする国レベルの公的観光機関を設置したのはフランスで、1910年に公共事業省の中に観光局を設置した。これが中央政府の行政組織内に観光の名を冠する部局が誕生した最初であるが、仕事の中心はフランスの対外観光宣伝であった。対外観光宣伝となると、大量の観光宣伝印刷物の作成配布や、来訪外客への情報提供はもちろん、外国（市場国）に宣伝事務所を設置して宣伝活動を行う必要がある。これまでになかった政府の仕事であり、そのための組織の在り方や宣伝経費の分担などについての試行錯誤が始まる。ちなみに、フランスに続いて国レベルの観光宣伝機関を設置したのは1912年の日本（ジャパン・ツーリスト・ビューロー）、1917年のスイス（第一次世界大戦末期）、1919年のイタリア、などと続いている。1929年のニューヨークの株式大暴落に端を発する大恐慌によって貿易が激減した時国際観光による外貨収入がクローズアップされ、多数の国が国立の観光宣伝機関を設置し、観光客誘致に力を入れるようになる。

こうした国レベルの観光政策については、第6部で改めて採り上げることとする。

5. 観光資源の保護と活用

ヨーロッパでは、ルネサンス期にギリシャ・ローマ時代の文化遺産を発掘し、記録し、保存する活動が始まったことは第4部で述べた。これらは文化遺産の保護であって、観光のための資源保存という視点が入ってくるのは19世紀末期以降である。鉄道の登場によって近代ツーリズム時代に入り、観光客が増えるにしたがって、観光による自然環境の劣化という問題に直面する。他方、戦火や放置したままによる文化遺産の破壊や劣化の問題もある。また、歴史的文化遺産を、関心ある人々や観光客に公開するためには、公開のためのコンセプトを必要とし、参観客を受け入れるスペースや展示の方法などを決定しなければならない。本項ではそうした動きについて概観しておく。

「文化遺産」意識の登場：フランスの場合

ジャン＝ロベール・ピット「フランス文化と風景」によると、フランスでは19世紀になるまで文化遺産としての景観という概念は存在しなかったという。いつの時代でも、古いスタイルの建物や都市を無造作に破壊し、変形してきたし、農村景観や自然景観については、なおさらであった。古いものを一掃するのは活力がある証拠であり、古いものを破棄してその上に新しく「より良いもの」を作り出すのは当然の行為とされてきた。下p165

ルネサンス期に古代文化が発掘され、それらの保存の動きが生まれたが、18世紀の近代啓蒙主義の時代になると、古代への強い関心、アカデミズムの勃興、ギルド（同業組合）の衰退、近代文明に対する疑問などの事情がかさなりあって、価値の基準を他の時代や他の地域に求める風潮が広まった。過去の遺産は、古さゆえに価値があるという考えも、この頃初めて芽生えたのであった。とはいえ、過去の遺産に対する態度が一貫しているとは言えず、古代ローマの遺跡を大切にする一方で、中世のゴシック建築などは悪しき遺物として破壊し、消し去ろうとする動きも活発化したことはすでに述べた。

フランス革命期には、貴族と僧侶階級が没落したことによって、彼らが所有し、保管してきた様々な文化遺産が廃棄され、危険にさらされた。革命思想と相いれないもの、理解されないものは容赦なく破壊された。その中で、画家であり考古学者でもあったアレクサンドル・ルノアール（1761～1839）は、教会や貴族の館から持ち出して山積みされた美術品等を破壊や散逸から守るべきことを訴えた。憲法議会の決定によって歴代王家の墓が暴かれ、骨を溝に投げ捨てるような暴行を目撃した彼は、こうした革命の〈ヴァンダリズム〉と戦い、美術品や墓石の横臥像その他の装飾物を、私的にプティ・ゾーギュスタン修道院に集めて保存した。1795年、彼はこれらをフランス文化遺産美術館として公開し、その館長に任命された。これが現在のフランス文化財博物館の前身であり、この時使われた修道院がのちの国立美術学校〈エコール・デ・ボーザール〉となった。

ナポレオン一世時代の1810年、公的に使用されている建造物、彫像その他の美術品などを損傷すれば刑法によって罰されることが決められ、1830年に歴史文化遺産調査官の職が設置され、次いで1837年には、歴史文化遺産委員会が創設された。この時期の活動家として知られるのが、作家としても名高いプロスペル・メリメ（1803～70）である。彼は1834

年に歴史文化遺産調査官に任じられ、文化遺産調査のためにフランス中を旅行して回った。歴史的建造物が極めて嘆かわしい状態に置かれているのに驚き、ヴィオレ・ルデュックという若手の建築家に修復を委託した。ルデュックは精力的に修復事業に従事したが、修復に当たって大胆な解釈を施し、オスマンのパリ改造への評価と同様、修復の仕方について賛否両論があり、歴史的遺産の修復の在り方に一石を投じた形となった。なお、ルネサンス期以来軽視され続けてきた中世の建造物や美術については、ロマン主義者として活動したヴィクトル・ユゴー（1802～85）が、小説「ノートルダム・ド・パリ」の冒頭で中世美術擁護の論を展開したほか、生涯ゴシック建築などの中世建築・美術の復権を強くアピールし続けたことはよく知られている。

1887年には「国民的価値のある建造物および美術品の保存に関する法律」（景観法、3月30日付）が制定された。同法によって保護されるべき建造物や美術品が、目的及び性質によって分類され、文化遺産の保護という思想が明確にされた。有名なモニュメントにとどまらず、小さな教会堂でも、普通の民家でも、過去に由来する諸々のものが国民の遺産と認識されるようになり、伝統的な農地景観や自然景観までが、人類の遺産として数えられるようになったのである。ただし、これは始まりにすぎず、長い時間を経て都市の生活環境の画一化、規格化が進み、近代都市とその風景に対する根源的な問い直しが行われるのは、1960年代になってからとされている。戦争や合理主義的都市計画による破壊を免れた旧市街の再評価がなされ、ピットによれば、この時期によりやうくフランス景観史上初めて「破壊して再建する」という論理が拒否されるに至ったという。今日では、キーワードは「再開発」から「保全と修復」に代わり、政治家も都市計画者も、建築家も住民も、まるで卵の上を歩くように用心深くなっていると彼は書いている。

イギリスのナショナル・トラスト

フランスでは理念が先行することが多く、この種の活動にあっても、法律で定義して行うべきことを明示してから取り組むという行き方をする。しかし、イギリスでは、むしろ実態に即した形で民間によって運動が始まり、それが国民の納得を得て法律になっていくという逆の方向を辿ることが多い。イギリスでは、入会権の保存やリクリエーションのためのオープンスペースの確保、自然環境の保全などの民間の運動を出発点として、1894年に「歴史的名勝および自然的景勝地のためのナショナル・トラスト」**The National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty** という非営利公益法人が設立された（正式の法人登録は1895年1月15日）。自然環境や歴史的環境が破壊されるのを未然に防ぐために、国民からの寄付金や寄贈・遺贈などによって、土地や建物などを所有、保存、管理、公開する国民運動である。2006年の実績をみると、以下の通りである。（数字は要改訂）

会員数：2006年現在会員数約 345 万人（一般個人会費年額 34 ポンド）

所有資産：*250,000 ヘクタール(2,500 km²)（約3分の1は農地）

* 700 マイル(1,212km) の海岸線 (ネプチューン計画による)

* 300 件以上の建造物や庭園 (うち家屋 166,城館 19, 産業遺跡 49,
パブとイン 35)

公開資産 : 520 件 (うち 263 件は有料)、有料入場者数 1200 万人 (2006 年)

他国の羨む実績であるが、そこに至るまでには長い歴史があった。以下ナショナル・トラストの誕生と発展について概要を紹介する。

ナショナル・トラストは、いくつかの異なる分野の運動が合体して生まれたもので、次の 3 人が創立の中心人物であった。第一が「入会権」を守る運動の中心人物であった弁護士ロバート・ハンター (1844-1913)、次いで、都市の環境改革に奮闘した女性活動家オクタヴィア・ヒル、そして、湖水地方の環境保全に尽力した牧師のハードウィック・ローンズリー (1851-1920) である。成立に至るまでの過程をざっと見てみよう。

湖水地方の環境保護運動 フランスが文化財の保護保存から出発したのに対し、イギリスは自然保護運動が先に来ているのが注目になる。そもそも自然が大切なものであるという認識は、産業革命によって都市の居住環境が悪化したこと、観光客が大量に訪れることによって生じる汚染から自然環境を守ろうという二つの異なる対応から出発した。

最初に、世界初といわれる観光公害から見てみよう。イギリス中西部の湖水地方は、イギリスには珍しく 1000 メートル級の山々が連なり、大小 100 もの湖池が散在する数少ない景勝地として早くから人気が高かった。鉄道がこの地方に伸びてくる前から多くの観光客を迎えており、商業主義の侵入がウィンダミア湖畔の宿の値段を上げ、地方の素朴な人情が損なわれるという観光の負の影響が最初に表面化した地域であった。1844 年にケンダル～ウィンダミア鉄道の建設計画が公表されると、湖水地方の自然が壊され、静寂が破られる、と反対の声が上がった。湖水地方で生まれ、ロマン派詩人として名を高めた詩人ワーズワース (1750～1850) は急先鋒の一人であった。だが、彼が 1844 年にモーニング・ポスト紙に手紙を送って鉄道建設に強く反対したとき、進歩に反対する時代錯誤者として揶揄されるなど、新聞も世論も鉄道建設を支持していた。それでも、近隣の地主たちが鉄道敷設に反対したため、鉄道会社は計画を変更し、1847 年、ウィンダミア湖畔から 2 km 程離れた何もない原野を鉄道の終点とした。ウィンダミアは駅ができてから誕生した町である。それでも、ここまで鉄道が伸び、湖に遊覧船が走り出すと、予想どおり観光・レジャー産業が発展し、ウィンダミア町の人口も訪れる観光客も急増した。湖岸の寒村だったボウネス・オン・ウィンダミアの人口も増え続け、人口増と観光客の来訪による湖水の汚染が目立つようになった。

ウィンダミア湖以外にも湖水地方の入り口まで数本の鉄道が敷設されたが、個々の湖を結ぶ湖水地方内部の広大な空間は残され、内部の交通は駅馬車に頼るほかなかった。観光の発展を見据えた観光資本がこの状況を黙って見ているはずはなかった。1870年代半ばに湖水地方内部にまで鉄道を通す計画が持ち上がると、1876年に主としてホテルや商店の経営者ら関連業者が「イングランド湖水地方協会」を結成して鉄道導入を支持し、併せて美観を損なわないように道路を整備し、その他のアメニティの充実を図り、観光宣伝に力を入れるよう提言した。一方、地元ケンダルの工業資本家ロバート・サマヴェルを中心に鉄道反対運動が展開され、鉄道反対を声高に叫ぶ作家ジョン・ラスキンらと協力して世論に訴えた。反対派の分が悪く、ラスキンはドンキ・ホーテ扱いされたが、この時は別の理由で鉄道建設は沙汰やみになった。

湖水は自浄能力に乏しく、下水処理が難問であった。下水管を通すにも沈殿槽を設けようにも、候補地は見晴らしのいい邸宅の敷地内にあつて地主が買収に応じなかった。汚水をひとまず森の中に捨て、そこからパイプで湖に流すといういたって原始的な方法で処理された。弥縫策で持たせているうちに、1884年には水産庁が「湖底は不潔極まる」という警告を発するまでになり、詩人にその美しさを称えられた湖水が「糞だめ」と呼ばれるに至るのである（「レジャーの社会経済史」）

1883年、再度二つの鉄道建設の計画が持ち上がった時、自然保護派を代表して反対運動の先頭に立ったのが地元の牧師ハードウィック・ローンズリーであった。彼はサマヴェルの協力のもとに湖水地方を守る永続的な監視団体「レーク・ディストリクト・デフェンス・ソサイエティ」（LDDS）を結成した。メンバーには当代一流の文人や政治家が名を連ね、保護運動はこの時初めて新聞の支持を得ることができた。タイムズ紙やスペクテイター紙の力、大学やパブリック・スクールを含む全国的な請願運動に押されて、二つの鉄道建設計画は取り下げられた。湖水地方の保護運動は、世界初の観光公害への対応であり、自然保護運動の嚆矢でもあった。ローンズリーらが組織したLDDSは他者の行動を批判・制限するだけでなく、観光公害を怖れて湖水に通じる小道を閉鎖しようとする地主を説得して一般の人々の通行権を守る運動なども実施し、アメニティを守る運動を起こして、万人が湖水地方を楽しめるよう尽力した。

そうした活動が、やがて目的を同じくする別の二つの団体と協力してナショナル・トラスト結成に向かうのである。

入会地保存協会 ほぼ同時期に、ヴィクトリア朝の繁栄の陰で失われていく生活や美的価値を守ろうとする人たちが起こした画期的な運動が「入会地保存運動」である。産業革命による商工業の発展は人口増につながり（19世紀の前半にイングランドとウェールズの人口は2倍に増加）、工業・農業用地の需要が急増し、土地の価格が上昇した。それまで住民が家畜を放牧し、果実を摘み、薪、わらび、芝、泥炭、砂などを持ち帰る権利（入会権）を有した荘園内の共同利用地を、領主や大地主らが柵を設け

て囲い込み、農民たちを締め出す動きが活発化する。1848年に議会在が囲い込みの手続きを定める「囲い込み法」を制定したが、これは地主層が土地を囲い込み易くする事実上の推進法であった。政府や支配層にとって未来は都市の繁栄や工場建設にあり、古臭い土地の入会権はその妨げでしかなかった。囲い込まれた土地は工業、農業用地としてはもちろん、鉄道、道路、汚水処理、貯水池、墓地などの公共用地にも充てられた。

入会地は、貧農の暮らしに不可欠であっただけでなく、環境悪化が著しい都市住民にとっては、オープンスペースのきれいな空気やレクリエーションの機会、言い換えれば、心身の健康のための空間として必要であった。地主の囲い込みに対して農村では抵抗運動が起こり、都市では入会地の保存運動が起こった。しかし、産業の発達に明るい未来を見ている社会にあって、これを阻むのは容易ではなかった。実力行使や物理的抵抗は実効がない。入会権は慣例的なものに過ぎず、法廷での争いになれば、証拠探しや理論武装が必要になる。1865年、運動を効果あるものとするため、先駆的な政治家や弁護士や文化人らによって、入会地保存協会が設立された。以後この協会を拠点に法的な戦略が練られることになる。

運動の成果として、翌1866年、画期的な「^{メトロポリタン・コモンズ・アクト}首都圏入会地法」が成立した。首都圏の森や入会地が急速に消滅していく状況に議会も憂慮を示し、1865年2月、「首都の中および周辺の森林地、入会地およびオープンスペースを大衆の利用のために保存する最良の手段を調査する」委員会を設置した。ロンドン北東部の広大な森林地エッピング・フォレスト消滅のスピードの速さ、西南部のウインブルドン・コモンの荒廃が緊急課題とされた。ウインブルドン・コモンでは、領主が排水の実施とゴミの山の処理、ジプシーや浮浪者を追いつく請願を受けて頭を悩ませていた。そうした情勢の中で、領主の権限を維持しながら、大衆の利益とアクセス権を保証する方向で入会権を明確化することが求められた。その結果、上述の通り1866年に「首都圏入会地法」が成立したのであった。この法律は、ロンドンの中心部（チャリング・クロス）から半径15マイル以内のコモンズやオープンスペースを、農民の共同利用や市民のレクリエーションのために残し、地主といえども自由に囲い込みができないことを決めたものであった。法の適用は首都圏に限られていたが、それでも1万エーカー以上の土地に180のオープンスペースを包含していた。残るは同趣旨の措置を地方にも広げることであった。

入会地保存協会は1866年「入会地および入会地を大衆のために保存する方法」というテーマで懸賞論文を募集した。ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンを優秀な成績で卒業して法律事務所で働いていたロバート・ハンターはこれに応募し、首都圏入会地法を各地に拡大する理論と方法を論じた論文を提出した。ハンターの応募作は、一等賞にはならなかったが関係者に強い印象を与え、優秀6作の一つとして出版された。その後ハンターは入会地保存協会の法務担当スタッフとして活躍することになる。

オクタヴィア・ヒルの戦い 次が都市住民の福祉のために住環境を整える活動から、オープンスペース確保の運動に参加していった、ソーシャルワーカーの先駆者オ

クタヴィア・ヒル女史（1832-1912）である。オクタヴィアは幼い頃父の事業が破産し、あちこちを転々とする少女時代を過ごした。祖父のサウスウッド・スミス博士はイースト・ロンドンの伝染病病院の医師で、伝染病は接触伝染というより、スラム街の家屋の状況、人口過密、貧弱な衛生施設、そして、きれいな空気とオープンスペースの不足が原因であると考えていた。産業革命によって農村から都市の工業地帯に出てきた労働者たちの居住区の環境はみじめなものだったのである。

1830年代の初期から社会改革者と言われる人たちは、労働者の住問題への取り組みを始めていた。1840年代にすでにロンドンはもちろん、北部のリーズ、ヨーク、マンチェスターなどの工業都市についても、労働者の生活環境の実態報告が出されていた。中でも政府の委託を受けてロバート・チャドウィックがまとめた「チャドウィック報告」（1842年）は、深刻な状況を明らかにし、改善が急務であることをアピールした。紆余曲折はしたが、1848年に初の「公衆衛生法」**Public Health Act**が成立した。サウスウッド・スミス博士はその実現のために精力的に働き、オクタヴィアは祖父を手伝ううちに、イギリスの都市の恐るべき貧困の実態に気付かされたのであった。14歳にして祖父の指導の下に年上の20名ほどの貧民学校の女子たちの世話をする仕事を任された。彼女たちは、裕福な家庭の子供たちの玩具をギルドで作っていたが、わずかな賃金しかもらえなかった。オクタヴィアはここでの経験で、慢性病、栄養不良、疲労による消耗、そして肉体上の虐待を自分の目で見ても憤慨し、法律は最貧層の救済に役立っていないと考えた。家主は果たすべき義務を果たさず、貧者はなすすべを知らなかった。彼女は救済活動だけでなく、自ら家を所有して公正に提供したいと考えるようになっていった。彼女が世界初のソーシャルワーカーと呼ばれるに至る活動の始まりであった。

飛躍のきっかけはジョン・ラスキンの支援であった。ラスキンとはギルド時代に知り合い、仕事の傍らラスキンに絵画の手ほどきを受けていた。1864年ラスキンは、オクタヴィアの貧民救済と都市環境の改善への情熱にうたれ、父から相続した財産の中から、オクタヴィアがやりたい事業に使う資金の提供を申し出た。彼女は申し出を受け入れ、1865年、ラスキンはオクタヴィアの希望に沿ってメアリーボーンの最も荒廃した地区パラダイス・プレイスの、それぞれ6室ずつある3軒の借家を買って管理を任せた。いずれも不潔で荒れ果てた人の住める家ではなかった。彼女はただちに家の改修を始め、きれいに修理した後元の住民を住ませた。次いでラスキンは同じメアリーボーンのフレッシュウォーターに5軒の家を買ってオクタヴィアに預けた。彼女は「住宅改良計画」の実践を開始し、都市計画への関心から入会権保存協会に接触した。入会権の保存、オープンスペース確保の問題はオクタヴィアにとっても最重要課題の一つであった。このあと、オクタヴィアはロバート・ハンターと協力しつつ、ソーシャルワーカーとしての実績を上げ、著名な活動家になっていく。

ちなみに、湖水地方の保護運動の強力な推進者となったローンズリーとの縁もラスキン経由であった。ローンズリーは1870年にオクスフォードのベイリオル・カレッジに入学し、

当時オクスフォードの美術教授をしていたラスキンの指導を受けた。ラスキンの勧めでソーホー地区のセント・メアリスの教区牧師が運営する貧しい人のためのホステルの助手として働いていたが、ラスキンの紹介でキャリアの絶頂にあったオクタヴィアと知り合い、一緒に働くようになった。ところが、彼は働き過ぎによる神経衰弱にかかり、湖水地方のオクタヴィアの知人のもとで静養したことがきっかけで、この地で将来の伴侶を見つけ、レイ・オン・ウィンダミアにある小さな教会の牧師に収まったのであった。

ナショナル・トラストの誕生と発展

上に見てきたように、昔からの共有地であった入会地やオープンスペースが産業革命の進展とともにどんどん困り込まれ、都市住民や農民の生活を圧迫することへの抵抗から入会地保存協会という組織が結成された。他方、美しい自然や環境が汚染されることへの反発が自然環境の保護運動へと発展してきた。しかし、運動の対象は、まだ私有地内にある歴史的建造物などの文化遺産の保存にまでは及んでいなかった。入会権保存協会はオープンスペースの保存が直接の目的であり、入会権の擁護はそのための手段であった。だが、1880年に入る頃には、入会権の擁護に限定した運動では目的達成に至らないことに気づき、ハンターとオクタヴィアの影響のもとで、まず、歩行権擁護を運動に含めることとした。入会地であれ、私的所有地であれ、美しい田園地帯を面として保護する運動へと関心の領域を広げたのである。その裏には、湖水地方とロンドン周辺景観地の両方で歩道への脅威が明らかとなり、それが方針の変更をもたらしたのであった。

歴史的建造物の保護 次の飛躍は、オープンスペースや入会権、遊歩道確保の運動との関連で生じた歴史的建造物や文化財への関心であった。田園地帯の保護と保存は18世紀以来好古家の関心事であり、1877年には好古家の集まる古代建築物保護協会ができ、1882年には「古代記念物法」という法律ができていた。この法律は有史以前のドルメン、ストーンヘンジなどの土塁や巨石群、石敷きの道や塚などを対象とするもので、建築上の特徴ある通常の歴史的建造物は対象外であった。やがて一般の歴史的建造物の保護が問題になるに至って、古代建築保護協会も、より幅広く歴史的建築の保存の研究と知識を集約する団体へと発展していたが、この団体はアドバイスすることはできるが、直接的に物件の所有権を取得して保護する力はなかった。

1884年に、さるマナーハウスの所有者がオクタヴィア・ヒルに、邸宅と周辺の土地を大衆の楽しみのために贈与したいと申し出た。相談を受けたロバート・ハンターは検討の結果、仮に自治体が邸宅を受け入れたとしても、維持するための公金を支出する法的な権限がないと結論した上で、任意団体では土地の所有ができないから、土地を所有できる会社を設立することをオクタヴィアに勧めたのであった。この案件には間に合わなかったが、この時から寄贈や遺贈によって土地を所有し、かつ寄付を募って売りに出された土地や邸宅の購入を可能にする非営利公益法人の設立へ向かう。そして、多くの支持者を得て、1894

年「歴史的名勝および自然的景勝地のためのナショナル・トラスト」が設立されたのであった。

ナショナル・トラストという名称は、土地を所有する必要から当時の株式会社法のもとで非営利の団体を設立する際、信託を受けて土地を所有することを明示する組織名を模索した。その結果が「トラスト」（信託）であり、全国的な運動であることを示すために「ナショナル」をつけ、さらにやや長い説明的な目的を付して正式名称としたのであった。

ナショナル・トラスト運動は国民の支持を受け、獲得した資産が増加した結果、1907年に最初の「ナショナル・トラスト法」が制定され、獲得した資産を《譲渡不能》とする権限を付与され、永久保存が可能となった。これにより、寄贈・遺贈によるトラストの資産が増えていった。1937年には第二次「ナショナル・トラスト法」が制定され、これによってトラストの遺産の維持および目的の遂行のための資金源として、土地および有価証券の取得とその運用が許可された。この結果、新たにカントリー・ハウス保存計画が可能になったのであった。 p 260

ナショナル・トラストは民間団体である。運動の経緯からしても、政府とは距離を置いていた。政府は自然保護や文化遺産保護を最優先するとは限らず、公共の目的のためにはそれらの破壊を辞さない場合もある。運動推進者たちには、当初から政府は当てにできないという覚悟があった。中央・地方の政府と対立しながら運動を進めてきたのだったが、やがてトラストが国民の支持を得たことによって、政府の積極的な支援を引き出したのであった。

ネプチューン計画 最後に第二次大戦後のナショナル・トラストの活動として目覚ましい成果を挙げている「ネプチューン計画」Enterprise Neptuneを採り上げておく。ギリシャ・ローマ神話の海神ネプチューンの名を冠したこのプロジェクトは、1965年にスタートした。

産業革命以前の英国の海岸には人がほとんど住んでおらず、嵐や自然災害による破壊があれば、その都度その部分を修復するくらいの対応しかしてこなかった。産業革命以後、海岸は恐ろしい場所でも不毛な場所でもなくなり、魅力的なリゾートにもなり得る場所に変化した。マス・ツーリズムの進展によって海岸の利用が増え、20世紀の中ごろには、スポイルされずに残った海岸線を保存する必要性が強く感じられるようになっていた。政府は浸食作用の防止や防潮対策に毎年100～200万ポンドを支出していたが、海面の上昇を食い止めることは出来ないし、金をかけた対策も30～40年しか持たないとされた。無限に金のかかる金食い虫のようなもので、むしろ自然のままに放置して、自然と共生する方針に変更した。当時100年で海面が約60cm上昇すると予測されていたという。

手遅れにならないうちに保存措置を考えなければならない。学界の取組みが始まり、ナショナル・トラストも積極的な取組みを開始した。レディング大学が、航空写真と地上調査によって、25,000分の1地図に詳細な海岸利用状況を書き入れた地図を作成した。家屋があるところはもちろん、軍事施設、港、臨時のキャンプ場などを含む利用の細部が描か

れていた。ナショナル・トラストは、この地図をもとに総延長 3030 マイル (4848 km) の海岸線を 3つのカテゴリーに分けた。第 1 のカテゴリーは、市町村や港、軍事施設などに占有された「開発済み海岸」で、トラストによる取得対象外の海岸で、これが約 1,100 マイル (1,770 km) であった。第 2 のカテゴリーは保護すべき「とくに優れた景勝地」で、今後トラストが購入して行くべき部分で計 900 マイル (1,450 km)、第 3 が両者の中間の海岸で、開発されてはいないがトラストが購入するほど景観が優れていない 1,030 マイル (1,660 km)、及び、すでにトラストが所有していて損壊の心配がない 125 マイル=200 kmであった。この方針に従ってナショナル・トラストは、2006 年現在、700 マイル (1,212 km) の海岸線を所有するに至っている。

国立公園の誕生：アメリカの自然保護思想

自然保護の思想はアメリカで誕生し、ドラスティックな展開を見せた。イギリス人が北アメリカに入植したとき、そこには荒々しい自然、克服すべき自然があった。斧こそ開拓者のシンボルであり、森を切り開き、開墾して豊かな国に造りかえることが彼らに与えられた使命であり、それがアメリカの原風景であった。時がたち、東部の開発が進むと、後から来た人たちはもはや安価で肥えた土地を得ることはできず、貴重な資源である木材が不足するようになっていた。新来の入植者や東部で成功できなかった人々は、無尽蔵の自然資源を求めてアパラチア山脈を越え、ミシシッピ川を越えて西へ西へと向かった。

西部開拓 アメリカが 1803 年にフランスからルイジアナ (ミシシッピ川の西からロッキー山脈まで) を購入したとき、時のジェファーソン大統領は、メリウエザー・ルイスとウィリアム・クラークという 2人の陸軍大尉を長とする西部探検隊を派遣した。当時大陸内部の様子は何もわかっておらず、ミズーリ川とコロンビア川は源流でつながっているという噂さえあった。もしそうなら、川伝いに太平洋岸まで行ける。アメリカ史に名高いこのルイスとクラークの探検隊は、1804 年にミシシッピ河とミズーリ川の合流地点セントルイスを出発し、2年半をかけて未踏の荒野を踏破して、現在のオレゴン州コロンビアに到達した。これが西部開拓の始まりであり、探検隊は大量の調査データを持ち帰った。

この時の探検隊員の一人ジョン・コルターは現地で除隊し、ビーバーを追うマウンテンマンに加わって西部探検を続け、少なくとも今日のイエローストーン国立公園内のどれかの間欠泉に遭遇したと思われる。1810 年、セントルイスに戻り「轟く巨大な滝、熱湯が吹き出る巨大な間欠泉がある」と報告したが、人々は一笑に付した。誰もまともに信じはしなかったが、こういう話はなんとなく伝わり、折にふれて思い出されながら半世紀が過ぎ、正式に送り込まれた探検隊の人々によって改めて〈発見〉されるのである。1820 年代から 40 年代にかけて、農民たちは土地を求め、マウンテンマン達はビーバーを追い、自然と戦い、原住民の抵抗を受けながら西へ向かった。オクラホマ・トレイルから始まって、オレゴン・トレイル、サンタフェ・トレイル、サンフランシスコ・トレイルなど、西海岸へ

向かう何本かの街道が作られた。1848年にカリフォルニアで金鉱が発見されると、一攫千金を夢見る山師や冒険家たちが幌馬車を連ねてサンフランシスコを目指した。それらは自然と現地住民との戦いと征服の物語であった。

手付かずの自然が無尽蔵に存在しているアメリカで、なぜ自然保護思想が誕生したのか。以下、ロデリック・ナッシュ「人物アメリカ史」第12章（ギフォード・ピンショー）、岡島成行著「アメリカの環境保護運動」、上岡克己「アメリカの国立公園」の3書を中心に、アメリカの自然保護運動と、世界初のイエローストーン国立公園の誕生に至る経緯を概観する。

自然保護の先駆者たち 西へ西への開拓運動は、無垢の自然の破壊の連続でもあった。鳥獣は捕り放題、国民の大多数は有り余る自然を好きなだけ略奪していたが、それを必ずしも正しいと考えない人たちも生まれていた。とくに東部の知識人たちの中には、失われていく自然を嘆く人たちがいた。都市公園と田園墓地の誕生は、多くの人が集まる都市の環境悪化の結果であり、さらに、雄大な自然を破壊から守ろうという自然公園設立への要求が高まってくる。要求したのはもちろん自然に囲まれて生活する西部開拓者たちではなく、自然から疎外されはじめた東部の都市生活者だった。自然征服思想から自然保護思想へと自然観を変えたのは、東部に住みながら西部の自然の行く末に関心をもっていた詩人、画家、小説家たちであった。

ジョン・ジェームズ・オーデュボン（1785～1851）はその最初の一人である。画集「アメリカの野鳥」で名を高め、旅を続けながら〈森が消えて行く〉、〈文明の発展は果たしてよいことなのか〉と問いかけ、急速に開拓が進むアメリカの行く末に疑問を投げかけた。アメリカ初の本格的風景画家トマス・コール（1801～1848）は、ヨーロッパにはすでになくなっていく「アメリカの野生の美」こそ、旧世界の歴史や文化に代わるアメリカの宝であると主張した。インディアンの生活を丁寧に描いた画家ジョージ・キャリントン（1796-1872）は「自然を守れ、市民や世界のために、また将来の子供たちのために」と主張し、1832年に「国民公園」Nation's parkの設置を提唱した。彼はスー族がわずかなウィスキーと交換するために野生のバッファローを殺すのを知って心を痛め、野生動物も原住民も野生のままに過ごせる保護区を政府が設けることを提案したのであった。①政府の政策として保護する、②野生のままに保護する、③国民のための公園にする、という趣旨は後の国立公園の設置理由を先取りしたものであった。

都市が発達し、人口が増え続ける東部の上流社会では、自然を愛することが紳士の条件となり、未知なる自然を訪ね、その美しさを描写することが文学上のひとつのジャンルにさえなった。「スケッチブック」や「大草原への旅」を書いたワシントン・アービング（1783～1859）、辺境をテーマとする5部作「レザー・ストックング物語」（「モヒカン族の最後」、「開拓者」、「大平原」など）で知られるジェームズ・クーパー（1789～1851）らがあり、各方面から徐々に始まった自然擁護の声は、次世代のラルフ・エマソン（1803-82）やヘンリー・デーヴィッド・ソロー（1817-62）らによって新しい展開を見せる。

開拓者の国アメリカでは、「暗黒の原始」は神から遠く、伐り拓いて文明の光を当てること善であるとする考えが国のバックボーンになっていた。実際、人々は早く便利な生活をしたかったし、開拓すべき自然はあまりに広大であった。エマソンは、1836年の著作『自然』Natureの中で、自然と神と人間の関係を考察し、「野生の自然は役に立たず、伐り開いていくべきもの」という考えに異論を唱え、原始そのものに価値があることを初めて主張したのであった。彼以前の人々による自然の賛美は、開拓精神と矛盾しない範囲にとどまり、いわば「開拓」から取り残された山や森や海岸などの自然が対象であった。エマソンの14歳年下の友人ソローは、森に分け入る野外派で、エマソンに共鳴し、二人が住んでいたマサチューセッツ州コンコードの町から2、3km離れた森の中で2年2カ月を一人で生活した。その試みの記録が彼の代表作「森の生活」(1854年)である。この作品は19世紀半ばまでのアメリカの自然観をまとめたもので、次の時代に始まる本格的な自然保護運動の理論的根拠を築いたといわれる。

自然保護の父ジョン・ミューア 自然保護の思想を明快に打ち出し、これに生涯をかけた稀有の自然人がジョン・ミューア(1838-1914)である。ミューアは1838年、スコットランドに生まれ、1849年14歳の時、父母と幼い弟妹合わせて8人家族の一員としてアメリカに移住し、ウィスコンシン準州の未開地に入植した。激しい労働に耐えて勉強し、1860年にウィスコンシン大学に入学した。アルバイトなどで自立し、図書館で様々な分野の書物を読破した。2年目からは学費免除を得て楽になったが、ちょうどその頃南北戦争が激しくなり、教授や学生たちの多くが戦場に向かった。授業は休みが多くなり、世の中は騒然としてきた。ミューアは「私は第一の大学から第二の大学に移る。ウィスコンシン大学から自然大学へ」という言葉を日記に残し、徴兵を避けるためにカナダに行き、五大湖周辺の大原野を歩きまわった。ミューアの漂泊の旅の始まりである。カナダの広大な原野をさ迷い歩いた後、1000kmにおよぶ距離を徒歩で南下し、1867年10月、フロリダに到着した。そこから南米に渡るつもりだったが、マラリアにかかって生死の境をさまよひ、親切な漁師に救われる。そこで、南米行きを諦めてカリフォルニアに方向転換する。汽船でパナマ経由サンフランシスコに向かい、1868年3月に到着した。彼はその足で船内で知り合ったイギリス人と二人でヨセミテに入り、一か月半を山歩きで過ごしたあげく、一人残ってヨセミテ溪谷に居ついてしまった。それから8年、一度も町に住むことなくシェラネヴァダの山野を歩きまわった。ほとんどが自給自足、野宿の旅であった。その間いくつかの雑誌にヨセミテ紀行を発表し、とくに氷河の研究を熱心に行った。1874年に8年ぶりに下界に降りたあと、今度はサンフランシスコ北部から始めて、西部の各地を探検する。

後述するとおり、ミューアのヨセミテ登場は、当時州立公園になっていたヨセミテの維持管理に頭を悩ませていた人々にとって救いの神となった。

国立公園誕生前史

国立公園 National Park は、国が特別に保護すべき自然を指定して保護・管理する地域を指す。国が保護の主体となるためには、理念と構想と手段が必要である。多くの難題を克服して最初に設立された国立公園がイエローストーン国立公園である。世界初の国立公園が誕生するまでの経緯を見てみよう。

「公園」の誕生と変遷 まず、国立公園誕生の原点である「公園」について振り返っておく。今日では、公園といえば大衆のために公開された庭園 public park を意味するが、語源的に言えば、パークは狩猟場、とくに狩猟動物を保持するために王室が管理する〈囲まれた王の私有地〉であり、そこでの密漁は死を意味した。フォレスト forest は、狩猟場の外側に王が別に指定する狩猟の場であった。王の占有地ではなく、農民はフォレスト内に居住していいが、狩猟は厳禁、木材の伐採も制限される地域であった。逆説的だが、強権的な君主が最初の自然保護者だったといえなくもない。フォレストは、時代が進み人口が増加すると、多くが切り開かれて農地や牧草地になり、産業革命以後は工場や公共用地に使われて、英国の田園風景は大きく変わっていった。

貴族の私有地であったパークの方は細々ながら残ったが、貴族の力が相対的に衰えると、様々な用途のために売却されていく。他方、産業化の進展で都市環境が悪化する中で、都市近郊に存在するパークの一部は残されて、一般民衆のための憩いの場として開放されることになる。ロンドン市内のハイドパークやリージェントパークはそのようにして市民の公園となった。

都市住民の憩いの場として意図的に設計された最初の公園は、1842年にクリスタル・パレスの設計で知られるジョセフ・パクストンがリバプール南郊に開園したプリンス公園 Princes Park であるとされる。この公園は民間資金によるものであったが、1845年には、湾の対岸のバーケンヘッドに、はるかに広大な公園が公の予算によって開園した。

アメリカの景観設計者フレデリック・オムステッド (1822~1903) は、1850年にバーケンヘッド公園を訪れ、女王も最貧農民も等しく自由に楽しんでいる様子に感銘を受け、後述のとおり、帰国後ニューヨークのセントラルパークの創生に活かしたのだった。

アメリカの都市公園

アメリカ人は野生の自然の中に侵入したのだから、自然に囲まれ、自然は無尽蔵であった。しかし、近代化と都市化が進み、ひとたび自然が消え始めると、ヨーロッパのように開発から守られる貴族の広大な庭園や狩猟場は存在しなかったから、市民の総意によって保護しなければ、無秩序、無制限に自然環境が破壊される危険があった。事実、東部では都市化に伴って空間地はどんどん消滅していき、今日存在するボストン・コモンやフィラデルフィアのフェアマウント公園のような巨大公園は、市政と市民がかろうじて守った自然であった。

では、貴族が存在しなかったアメリカの都市で、公園はどのように作られたのか。第一に、貴族はいなくても軍事教練の場や牧草地として使用されてきた共有地はあった。開拓

が進むにつれてコモンは消えて行ったが、それでも一部が残されて公園になった。ボストン・コモンのケースである。第二は、フィラデルフィアの創設者ウィリアム・ペンのような先駆者が、火災に強い街づくりと住民の健康とレクリエーションのため、意図的に大きな広場を設けたのが公園になって残った例である。ペンは同市を「決して火災で焼失しない、健全な田園都市にすべし」と言って、3～4ヘクタールに1か所、計5か所の大きな広場（スクエア）を配置することを決めた。人口増加によって理想通りにはいかず、予定したところにログハウスなどが建てられ、区割りが乱されたりしたが、基本的な部分は市民の憩いの場として残された。さらに、これを補うため、1801年、市が周辺の土地約10ヘクタールを購入し、市民のレクリエーションの場として整備した。これが都市公園としては最大規模（16キロ㎡）のひとつとされるフェアマウント公園の起原である。

田園墓地 アメリカの都市公園整備のもう一つの形態が、アメリカならではの墓地公園、あるいは田園墓地である。植民地時代のアメリカの墓地は教会に付属し、埋葬が目的の墓石だけあるグレーヴヤード *graveyard* であった。墓地を大きく変えたのは、1831年にボストン郊外の丘陵地マウント・オーバンに創設された墓地公園 *Mount Auburn Cemetery* である。死や埋葬を直接表わさないギリシャ語語源の *Cemetery*（眠る場所）を使い、墓地のイメージを一新した。死者を悼み、キリスト教の教義を単純化した墓碑銘に充ち、そして、何よりも生者の憩いの場として作られたのであった。田園墓地という構想は、都市の過密化や衛生上の問題も絡む社会的必要性から生まれたものだが、フランス革命後にナポレオンによってパリ市東部に設置された無宗教のペールラシェーズ墓地の発想とイギリス式庭園を組み合わせ、アメリカ独自の開放的で優美な墓地公園となった。上岡克己は、この田園墓地は、大聖堂も古城も持たないアメリカのコンプレックスから来るヨーロッパへの対抗意識の現れで、ナショナリズムの高揚を思わせる発明であると言っている。

ニューヨークのセントラルパーク アメリカの都市公園は、その生い立ちから民主主義の果実のひとつともいわれる。とくにニューヨークのマンハッタンのど真ん中に創られた3k㎡もの広さをもつセントラルパークは、19世紀の半ばという時期に、王様の私有地のような守られた土地がなかった大都市に、よくぞこんな巨大な公園を造り得たものである。公園が企画された1851年、市内に小規模なコモンや公園はいくつも存在していたし、郊外に出れば、まだ未開発の空間地はいくらでも残っていた。しかし、移民の大量移入によって1821年から55年までに人口が4倍増し、都市の生活環境は悪化する一方であったのも事実であった。

ニューヨークにも、パリのブローニュの森やロンドンのハイドパークのような大公園が必要との主張は、かねてからイヴニング・ポスト紙のエディターであったウィリアム・カレン・ブライアントやアメリカ初の景観設計者アンドリュー・ジャクソン・ダウニングらが主張していた。碁盤目状の市街地の開発を策定した1811年の都市計画には、セントラルパークは入っていなかったから、新たな構想によって始めるしかなかった。公園設置に

熱心だったマスコミや文化人の支援で当選した新市長が、1851年、州政府に公園設置のための土地の購入を申請したことからこの構想は動き出した。州政府は第一次公園法を制定した。これはイーストリヴァーに面するジョーンズ・ウッドとよばれる農地の一部を買い上げて公園とする案であったが、1853年に大規模な公園の設置を求めるブライアントらの要請で「修正公園法」が制定され、市有地の59丁目から106丁目までを公園とすることを決め、1857年に一部整備して公開された。これがセントラルパークの起源である。

翌1858年、公園整備のためのセントラルパーク委員会が、セントラルパークの将来像を決めるため、景観設計案をコンテストによって募集した。最大の公園推進者であったダウニング(1852年にハドソン川の汽船の爆発事故で37歳の若さで死去)の推薦で公園設置に係わるようになっていたフレデリック・オルムステッドとカルバート・ヴォーが共同で作成した設計案が採用され、以後造成に23年をかけて、1876年に一応完成した(その後も拡充や修正は続く)。セントラルパークはただの都市公園ではなく、都会を思わせるものは庭園すら避け、牧歌的な風景の中に、樹木や小川、散歩道を組み込んだ。最終的に、東西はセントラルパーク・ウェストから五番街まで、南北は59丁目から110丁目に至る3.4km²の空間を占めるが、元からあった自然は皆無といってよく、すべてが人工的に造形された自然である。

国立公園への道

自然をいかに保存するか。形態はいろいろあっても、国民のために広大な自然を公園として残す先例が作られ、それが1864年のヨセミテ州立公園、1872年のイエローストーン国立公園へとつながっていく。そこに至る道程はどうであったのか。

ナイアガラの教訓 自然は、歴史と伝統のないアメリカの誇る財産であった。中でも最初に人々を瞠目させた大景観がナイアガラの滝であった。19世紀初頭までは交通が不便で観光どころではなかったが、やがて汽船や鉄道が通じると、富裕層が見物に訪れるようになる。絶景を称えるオーデュボンやコールが現れ、「聖地」のないアメリカで、〈神の作り賜いし壮観〉のナイアガラが聖地に代わる巡礼地となった。エリー運河が開通し、自然の奇観とテクノロジーの勝利が違和感なく結びつき、アメリカ人を魅了した。

しかし、1840年に入ると俗化が始まる。宿泊施設や土産物屋、その他の観光施設続々建てられて視野を遮り、川の中の島には橋がかけられた。国民に自然保護の意識が芽生える前に環境が大きく損なわれてしまったのである。その有様を見たヨーロッパ人は、アメリカ人を実利主義過ぎて、愛国心も分別も自尊心もない、と批判した。本来なら国立公園に指定されてしかるべきナイアガラの景観は、対応策を立てる前に俗化してその資格を喪失したのであった。ナイアガラもまた、観光客が無統制のままに増え続けると、環境が悪化し、観光地としても劣化していく最初の事例の一つとなったのであった。

ヨセミテ州立公園の成立:1848年の金鉱発見は、西部の自然を広く紹介することになった。1852年には樹齢3000年、高さ95m、周囲18mもある巨大セコイア群が発見されると、巨木の皮を剥ぎ、見世物用にロンドンに輸出しようとするものまで現れた。ロンドンではあまりの大きさに本物として扱われず、この事業は失敗に終わったが、さる雑誌に「そのような素晴らしい木を切り倒すとは…。ヨーロッパでは、自然は大切にされ、法で保護されている。アメリカでは金儲け万能の社会で、お金で巨木を買い、買った者は切って見世物に使う有様だ」という投書が載り、アメリカ国内にも反省の声が高まり、皮肉にも巨木事件が人々の目を西部に、そしてヨセミテに向けさせたのであった。かくして巨木群(カウンティの名前からマリポサ・グローブと呼ばれる)や豪快な峡谷美が絵画や写真によって伝えられ、一目見ようと訪れる人が増えた。この地に無断で住み着いたり、土地の所有権を主張する者も現れ、放置すればナイアガラへの舞になることが心配された。

1864年、カリフォルニアの州民は、ヨセミテ峡谷とマリポサ巨木群を破壊から守るために、州選出のコネス上院議員を通じ、州政府にこの土地を割譲するよう連邦政府に要請した。この時点ではまだ国立公園という概念がなかったから、いったん州立公園に指定しておくことが重要であった。なぜなら、連邦政府の公有のままだと、1862年の「ホームステッド法」によって、合衆国民が5年間開墾して農業を営めば160エーカー(約65ヘクタール)の土地を無償で取得することが認められていたからである。

1864年6月30日、南北戦争の末期であったが、リンカーン大統領は「ヨセミテ公園法」に署名し、これによってキャトリンやソローが提唱したアメリカにおける最初の自然保護区としての広域公園が具体化したのであった。コネス議員が連邦公有地の割譲を求める意見書に付した説明には、その理由として第一に、経済的価値がないこと、第二に、世界に通用する景観であること、が二大ポイントとして挙げられている。上岡によれば、経済発展の妨げにはならないことを強調し、愛国心にも訴えたのであった。これ以後この二つの理由は、国立公園等の設置のための決まり文句になった。

ただし、この時割譲された土地は、ヨセミテ溪谷とマリポサ巨木群のある広さ150km²だけであった。ヨセミテ州立公園はできたものの、維持管理の資金は不足し管理は容易でなかった。自然保護のための知識も乏しかった。ヨセミテ公園に幸いであったのは、ちょうどこの頃、セントラルパークを設計したオルムステッドが一時的にセントラルパークの仕事から離れ、1863年からカリフォルニアにいて、マリポサ近郊の鉱山の仕事をしていたのであった。彼は請われてヨセミテ州立公園の創立とその後の管理と整備方針について得難いアドバイスを与えた。1865年にオルムステッドの提出した「ヨセミテ溪谷とマリポサの巨木群」と題するレポートは、のちに「オルムステッドこそ、州立・国立公園創設の哲学的基礎を固めた人物」と評されることになるのだが、この時点では公園整備に巨額の予算がかかることを怖れて握りつぶされ、日の目を見なかった(1952年に発見された)。レポートを提出してまもなくオルムステッドはカリフォルニアを去り、州立公園管理の適任者を失って困惑していたところに登場したのがジョン・ミューアであった。ジョン・ミュー

アの尽力によって、1890年、ヨセミテは区域を大幅に広げ、巨大な国立公園になるのである。

イエローストーン国立公園の成立

原始の森の奥深く隠された、鮮やかな色彩の温泉や豪快な間欠泉、壮大な滝。現代のわれわれはツアーで簡単に訪れることができるし、映像でならいくらでも見ることができる。しかし、ここを訪れた最初の西洋人とされるコルターは、自然の驚異に呆然としたし、その発見を伝えても、人は容易に信じなかった。西部の大自然に遭遇したアメリカ人の歴史を振り返ってみよう。

コルターとブリジャー 1804～06のルイス＝クラーク探検隊の一員であったジョン・コルター（1775～1813?）は、名誉除隊を許され、西部にとどまって探検を続けた。彼は出会ったマウンテンマンと行動を共にしたり、ある時はまったく一人で今日のイエローストーン国立公園とグランドテートン国立公園の一带を歩きまわった。1810年、セントルイスへ帰って「轟く巨大な滝、熱湯が噴き出る巨大間欠泉がある」と報告したが、人々は一笑に付し、「コルターの地獄」と呼んで信じなかった。少なくともコルターは、一つ以上の間欠泉を発見し、イエローストーン湖にまで来ていることは確かであると考えられている。1820年から40年頃、毛皮を求めて動きまわるマウンテンマン達から同様の報告がもたらされたが、神話伝説の類とされ、まともには扱われなかった。1856年には、ソルトレークを発見したとされるマウンテンマンのジム・ブリジャーもイエローストーン地区に入り、湧き立つ温泉や吹き上がる温泉などの奇観を報告したが、「ほら吹き」といわれていたブリジャーの言葉を信じる人はいなかった。1859年に陸軍のウィリアム・レイノルズ大尉をリーダーとする調査隊が派遣され、2年がかかりで探検調査を行った。ジム・ブリジャーが案内役に立ち、若き日のフェルディナンド・ヴァイデン博士も一員として参加していたが、この時は分水嶺の峠越えに失敗し、イエローストーンには行けなかった。ちなみに、特定の人物を採り上げて、その歴史背景を解説するロデリック・ナッシュの「人物アメリカ史」は私の愛読書のひとつだが、西部開拓の歴史は、第6章「ジム・ブリジャー」によって語られている。トラップ（罟猟師）であり、探検家であったブリジャーの人生を通じて描かれる初期の西部開拓史は大変興味深い。山を下り、水辺で水を口に含んで塩水と知って、「太平洋だ！」と叫ぶブリジャーは、まさしく西部開拓期の男の象徴的存在として描かれている。

さて、1861年にモンタナで金鉱が発見されると、各地から続々と山師たちが集まり、その一部はイエローストーン川からモンタナに入るコースを行く者もいて、ついにイエローストーンの奇観が大勢の目に触れることになった。しかし、折から南北戦争が始まってしまい、60年代中は本格的な探検隊を送ることができなかった。

イエローストーンの夜（1870年9月19日） 1870年8月、ヘンリー・ウォッシュバーンとグスタフ・ドアンをリーダーとする探検隊がイエローストーンの奥深くに入った。この地

域を探索する初の本格的調査隊は、約1か月の調査を行った後、下山前の9月19日の夜、漆黒の闇の中でたき火を囲み、イエローストーンの将来について語り合ったという。岡島成行はこの夜のことを、隊員の一人ナサニエル・ラングフォードの日記を借りて次のように描写している。

この時、多くの隊員は、素晴らしい景観を楽しめる地域を取得して観光開発をしようという意見だった。しかし、コルネリウス・ホッジスだけは、この地域を個人所有にしないで、誰もが自由に楽しめる「国立公園」にすべきだと主張した。ラングフォードは「国民のための保養地」という新鮮なアイデアを聞いて興奮し、その夜はいつもの半分しか眠れなかったと述懐している…

モンタナに帰った探検隊は手分けをして地元の新聞に記事を送るなど、イエローストーンの素晴らしさを伝えた。反響は大きく、数日にして東部の新聞にまで記事が載った。ニューヨークタイムズは「まるでおとぎ話を聞くようだ」と書き、自分の国にそれほどまでの自然景観があったことを手放して賞賛した（岡島 p70）。

鉄道会社の支援 盛り上がる世論を見ながら、これを利用しようと考えたのが鉄道会社であった。ノーザンパシフィック鉄道（合衆国最北部を走る大陸横断鉄道）の幹部は、この地がイエローストーンが国立公園として観光名所になれば、観光客が押し寄せ、鉄道も潤うと考えた。その年1870年の冬、鉄道がスポンサーになってラングフォードを東部に送り、ワシントン、ニューヨーク、フィラデルフィアなどの都市で講演会を開いてイエローストーンの素晴らしさを伝える一方で、「イエローストーンを国立公園に」という大キャンペーンを行った。この時のワシントンでの講演会の聴衆の中に、重要人物がいた。若き日に失敗したイエローストーン探検隊に参加していたペンシルヴァニア大学の地理学教授フェルディナンド・ヴァイデン博士であった。ヴァイデン博士はラングフォードの話聞いて、他への探検予定を変更して、1871年にイエローストーンに探検隊を送ることにした。議会はヴァイデン探検隊に四万ドルの資金を出し、ヴァイデンはモランやジャクソンなどの芸術家を帯同した。探検終了後、彼らがイエローストーンの美しさと豪快さを目で見える形で示し、探検隊の成果を広く知らしめる効果があった。こうした報告は東部の知識人の間でセンセーションを巻き起こし、ヴァイデン博士の巧みな議会工作もあって、ヘッジスが国立公園の提唱をした「イエローストーンの夜」からわずか2年後の1872年、時のグラント大統領が法案に署名することによって、世界初のイエローストーン国立公園が誕生した。これによって、東京都と千葉県を合わせたほどの約80万ヘクタールが永遠に自然のままに残されることが決まったのである。これだけ早く成立した背景には、ヨセミテ州立公園創設のための様々な研究が役立ったことはもちろんである。

ヘッチヘッチー論争（開発か自然保護か）

ヨセミテ渓谷（1891国立公園に指定）の北30kmのところにあるヘッチヘッチー渓谷も、

ヨセミテと同じく美しいので、ヨセミテが国立公園になる際に公園に組み入れられていた。慢性の水不足になやむサンフランシスコ市は、この溪谷がダム最適地として以前にもダム建設を検討したことはあったのだが、国立公園内であることから諦めていた。しかし、低地の部分に私有地が残っていたことを理由に、1901年、改めてヘッチヘッチー溪谷にダム建設を計画したことから、その可否をめぐって13年に亘る大論争になった。推進派は保護派の気がつかぬうちに、「公有地優先法」（1901年）という法律を通過させていた。内容は、連邦政府の管轄する土地内では、公益に反しなければ運河、パイプライン、トンネル、水路等を優先的に作っていいと定めたものであった。その意味ではすでに勝負はついていても同然だったのだが、保護派は「国立公園法」に依拠して戦った。公園外なら問題ないが、国立公園内は自然のままに保存するのが基本であると主張した。そこで、2つの法律の整合性をめぐる戦いとなったのである。

ミューア対ピンショウ もとは連邦政府所有の土地であっても、一度払い下げられてしまえば政府の手は全く及ばなくなる。私有地は個人主義、民主主義、自由企業制度によって守られているからである。ダム建設反対派の急先鋒はミューア、推進派はピンショウ森林局長であった。ミューアについてはすでに紹介したが、アメリカの自然保護のもう一人の代表的な人物がギフォード・ピンショウであった。

ピンショウは東部の裕福な家庭の生まれである。東部では、すでに土地から生活の糧を奪取する必要はなくなっており、自然はすでに人間にとって脅威でないばかりか、自然界は〈貴重品〉であり、場合によっては人間の保護を必要とする存在であった。ジェーン・アダムズが見捨てられた移民に献身の対象を見出したように、自然を愛していたピンショウが選んだのは、資本主義のもう一つの搾取対象である森林であった。1885年にイエール大学に入学したが、イエールのみならずアメリカに森林学を教える大学はまだなかったので、大学では生物学、地理学、気象学、天文学などを学んだ。卒業と同時にアメリカには存在していない森林管理官を志し、ヨーロッパで訓練を受けるべく大西洋を渡った。森林資源に限りがあった旧世界では、樹木は作物の一つと見做され、木材の持続的な生産を可能にするために、人の手によって念入りな管理が続けられていた。ピンショウはナンシーにあるフランス森林学校で学ぶことにしたのだが、森林学を学ぶようになって驚いたのは、森林管理官たちが強力な権限を与えられた政府の高級官吏であり、木々を焼き払ったり、不法に伐採したりすると厳重に処罰されることだった。すべての木が鉛筆大の棒切れにいたるまで念入りに集められ、利用されていた。フランスとドイツの森林から上がる歳入の大きさはピンショウを一驚させたが、そればかりか、その生産水準がコロンブスの時代以来常に一定して変わらないということであった。 p 61

ピンショウが帰国して見たものは、憂うべき状況だった。アメリカ人は今も自然が無尽蔵であると信じ、政府による一切の制約なしに、やらずぶったくりで自国の自然を凌辱していた。持続的に資源を管理するどころか、樵たちはイナゴの群れのように森を丸裸にしては西に向かって進んで行った。樹木は敵であり、樹木を切り倒して土地を開墾すること

がアメリカ人の勝利の象徴なのであった。ヨーロッパで勉強してきたピンショールにとって、アメリカ人の自然観はヨーロッパ人とはあまりにも違っていた。例えば山火事について。アメリカでは1891年だけで1,200万エーカーの森林が焼けたと聞いてもあくびするだけなのに、ヨーロッパでは6000エーカー以下のただ一度の山火事を90年後まで嘆いているという相違があった。ピンショールは、自然破壊に歯止めをかける政府規制がないことがいかに自然を破壊しているかを無念に思ったが、この時点では政府自体が開発業者と同類であった。一世紀以上にわたって州と連邦の政府は、施しものような値段で公有地を売り渡してきたのであった。ノースカロライナ州は、世界で最も良質の広葉林を1エーカー当たり10セントという超超安値で売却したし、連邦政府は鉱山業者や鉄道会社に何百万エーカーもの土地を無料で与えていた。

東部の先駆者たちがこうした状況を憂慮して、自然保護のための活動に献身してきたのは上述の通りである。その点で彼らはピンショールの心強い味方ではあったのだが、樹木を作物の一つと考えることになれた森林管理の専門家ピンショールにとって、森林学という科学によれば、成熟した樹木を選別して定期的に伐採する必要があるがあった。その点でピンショールはミューア等のありのままに自然を保存するという考え方とは一線を画していた。1892年に自然を守るためのシエラ・クラブを設立したミューアは、保護地区を指定して開発を阻むことを目的としたのに対し、ピンショールは保護地区とすることは、森林の持続的生産に乗り出す土地とすることだったのである。ピンショールにとって自然はよく管理して人間の役に立てるのが当然であって、野生のままの自然を手つかずに残しておくことは、資源の「閉鎖」^{ロックアウト}でさえあった。

この自然に対する見方の相違ゆえに、ミューアとピンショールはヘッチヘッチー問題でついに激突したのであった。結果はどうであったか。1906年サンフランシスコ大地震が起これ、火災で町が焼き尽くされた。1908年、サンフランシスコ市長正式にヘッチヘッチー・ダム^{ヘッチヘッチー・ダム}の建設を申請し、6年に及ぶ論争を経て、1913年ダムの建設を決定された。

都市の膨張がどうしてもダムを必要としたのだから、どこで折り合うかが問題であった。文明の発展と自然保護との相克という今日の論争の原点となったのである。

国立公園をめぐる アメリカで国立公園誕生の経緯をみると、国立公園とは手つかずの自然を広域指定し、明確に境界を設定して管理できる場所でなくてはならない。中には私有地があるようなケースは考えられない。民主的な国家として発展してきたアメリカが、公有地を公共のために保存するという理念を承認し、先見性ある人々が国立公園の必要性を熱心に説いたとき、まだ西部に文明化されないままの手つかずの大自然が残っていたからこそ可能であった。

19世紀中に設立されたイエローストーン、ヨセミテ、マウントレニアの設定の条件は壮大な自然景観と有し、かつその土地が経済的無価値であることであった。国立公園が指定された後でも、1916年に国立公園局が設置されるまで、国立公園を所管する行政機構さえ連邦政府内になかった。20世紀に入り、南西部で開拓が進むと、先住民の遺跡や工芸品な

どが破壊されたり盗掘などで失われたりするため保護しようという動きが活発化し、1906年に画期的な「古物保存法」Antiquities Act 成立した。自然景観だけでなく古代の遺跡（つまり先住民のもの）などをも保存の対象にするものであった。これによって「国立記念物公園」National Monument の設置が可能になった。違いは、国立公園は議会の承認がないと設置できないが、こちらは大統領の布告で設置できた。議会は国立公園にあまり関心を示さなかったから、まず国立記念物公園に指定しておいて保存を確定し、折を見て国立公園に格上げするという道も開かれた。現在 58 の国立公園があるが、今では国立公園システムは、歴史や文化などすべてを含むものとなっている。

ちなみに、アメリカ大陸と同じく、先住民が少なかったオーストラリアとニュージーランドでも、私有地を含まず、公園の境界内をきちんと管理できる広大な面積を持つアメリカ型の国立公園が存在する。他方、イギリス、フランス、イタリアなどヨーロッパ諸国にも国立公園があるにはあるが、小規模で、自然があまり手が付かずに残っている場所のうち、景観の優れた場所を指定している。雄大なアルプスを有するスイスの国立公園はひとつだけである。

日本でも 1931 年（昭和 6 年）に国立公園法が制定され、1934 年（昭和 9 年）3 月に最初の国立公園として、瀬戸内海、雲仙、霧島の 3 公園が指定され、順次増えてきたが、アメリカのように手つかずの大自然があるわけではないので、人家も遺跡も含みこんだ地域の指定である。日本の国立公園の歴史については、稿を改めて紹介したい。